参考資料-2

第２章　札幌市の姿

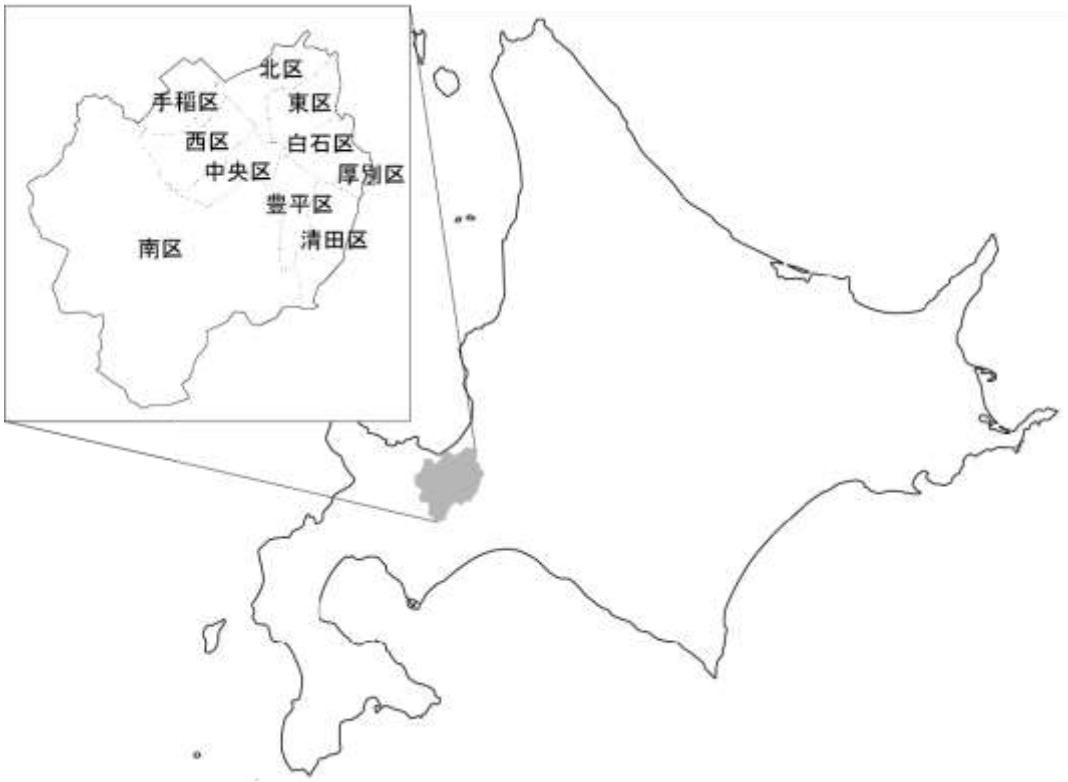
１．　自然環境・地勢

（１）位置

札幌市は北海道・石狩平野の南西部に位置しており、総面積は1,121.26㎢。東京23区の約2倍、香港とほぼ同等の面積を持ちます。市域は東西が42.30km、南北が45.40km、高度は最高地が南区定山渓（余市岳）1,488.0m、最低地は北区西茨戸（旧発寒川付近）1.6mです。

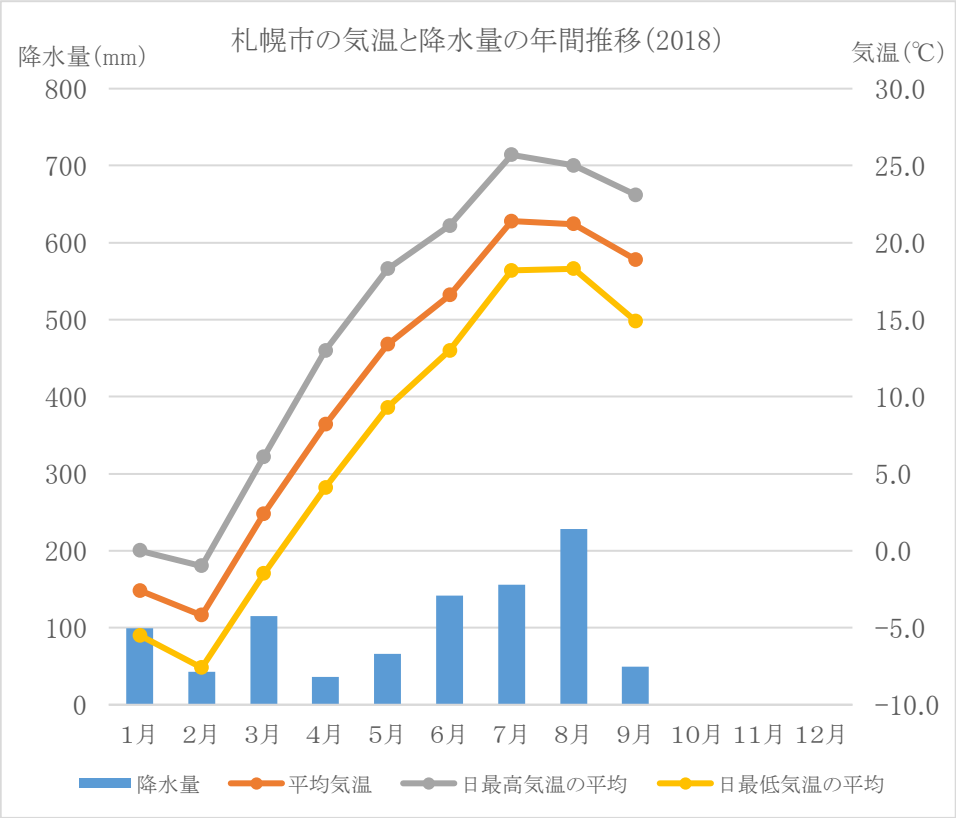
大正11年（1922年）8月1日の市制施行以来、近隣町村との合併・編入を重ねて市域を拡大し、現在札幌市に隣接する市町村は後志管内小樽市、赤井川村、京極町、喜茂別町、胆振管内伊達市、石狩管内恵庭市、千歳市、北広島市、石狩市、江別市、当別町の計7市3町1村です。

極東東経141°30′20″、極西東経140°59′26″、極南北緯42°46′51″、極北北緯43°11′22″に位置しており、ほぼ同じ緯度の世界都市はロシアのウラジオストク、カザフスタンのアルマトイ、フランスのマルセイユなどがあります。



（２）気候

日本海型気候の札幌市は、夏季はさわやかで過ごしやすく冬は積雪寒冷で、四季の変化がはっきりしています。4月下旬から6月は晴天が多く、花が次々と開花する様子が見られます。6月下旬から8月は平均気温が20℃を超える盛夏となりますが、湿度が低く朝晩は涼しくなります。9月は気温が下がり始め、10月には紅葉、10月下旬頃には初雪が降ります。根雪となるのは12月で、年間を通しての積雪量は6mにも達します。1月の平均最低気温は-7.0℃で、平均積雪日数は年に125.9日です(1981～2010年)。3月に入ると寒気が緩みだし、4月の上旬には根雪がなくなって長い冬がようやく終わります。札幌の年平均気温は8.9℃、年平均降水量は1,106.5㎜(1981～2010年)です。



（３）植生

本市は石狩平野の南西部に位置し、東は石狩川から月寒台地と野幌丘陵に至る低地帯と丘陵及び台地を成し、西は手稲山系が連なり、それに続く南には定山渓から支笏湖に至る標高1,000m前後の山岳地帯、北は低湿地から石狩砂丘を挟んで日本海に面しています。人口が集中する地域は豊平川扇状地の上に当たり、平野で比較的水はけがよい土地であり、やせ地でも生育するカシワやミズナラがかつては多く生えていました。現在の札幌駅周辺には、扇状地の伏流水が地表に出た湧水があり、湿地を好むヤチダモやハルニレなどの湿生林が見られました。扇状地以北及び以東の地域は部分的に泥炭地があり、湿原植生が広がっていました。

このように札幌周辺の地形・地質が多様で変化に富むことに加え、北半球の中緯度に位置し、気候が冷温帯と亜寒帯との移行帯にあるため、温帯系と北方系の植物の分布域が重なります。そのため、札幌周辺は道内でも植物の種類数が比較的豊富で、北海道に産する自生種の約半数を見出すことができます。札幌を含む石狩低地帯が分布の境界となっている代表的な植物として、温帯系のクリやコナラの北限が知られています。また、藻岩山及び円山は低山でありながら樹種が豊富であることから国の天然記念物であり、市域が含まれる野幌森林公園の一部も特別天然記念物で、いずれも市街地に接する貴重な森林植生です。

市街地となった平野部に対し、手つかずの自然が多く残る山岳地帯のほとんどが支笏洞爺国立公園として保護されています。それ以外にも本市域で最高峰となる余市岳や手稲山や空沼岳などで国内でも極めて分布の限られる高山植物が確認されています。

植生帯としては、北海道を特徴づける針広混交林帯が山麓部で見られます。北海道における針広混交林帯の構成樹種は主にイタヤカエデやシナノキ、ミズナラ、ハルニレなど広葉樹と、エゾマツ、トドマツといった針葉樹で、これらがモザイク状に混生した森林となっています。これは道南及び本州以南では見られない植生で、上記同様に気候の移行帯にあることが関係します。また、日本海側の多雪地に特有の植物としてハイイヌガヤ、エゾユズリハなどが分布します。

このように、現在の札幌市は人口が 196 万人を超える大都市ですが、本市の森林面積は総面積の約 64%を占め、広葉樹が主体の天然林が多いことなどから、都市を取り巻く自然環境は比較的恵まれていると言えます。しかし、前出の藻岩山、円山も一部は開拓初期には伐採された歴史があり、その後の学者や市民の活動もあって保全されてきました。また、中心部にある北海道大学植物園内には開拓以前からの植生と地形が残され、ヤチダモやハルニレなどの大木が残りますが、近年ではエゾイタヤの増加が認められています。これは自然の遷移もありますが、都市化による地下水位の低下による乾燥化が一因と推測されています。同様に、本市北東部の広大な湿原は 1970 年代までに人為的に排水され農地として整備され、その後の宅地化でそのほとんどが消失しました。現在は北区及び東区にわずかに湿原植生が残り、絶滅危惧種を含む湿原特有の生物の貴重な生息環境となっています。

近年では外来種の増加が社会的問題になっており、今や全国に広まったセイヨウタンポポが初めて確認されたのは札幌とされています。同様にハリエンジュ（ニセアカシア）は街路樹・公園樹として植えられたものから全国で野生化し、札幌でも川沿いや市街地に近い山、林道などに侵入しています。

このように、本市のもともとの植生は大きく改変され、市内の絶滅のおそれのある野生生

物のリストである札幌版レッドリストには123種類の植物が挙げられています。一方で、市街地に天然記念物の森林が接し、市民のレクリエーションの場として親しまれ、市内各所で市民による自然環境の保全活動や外来種の駆除が行われています。札幌の植生の変遷には、開拓期からの街の歴史と市民の自然のとらえ方が大きく関わっていると言えます。

（4）地形・地質

札幌市の地形は、南西部に広がる山地、南東部の丘陵・台地、北部の低平地とそこへ流れる豊平川がつくった扇状地の4つから成り立っています。地質の基盤は、先第三系の海成層「薄別層」です。

【南西部 山地】

札幌の市域に占める山林の割合は約6割で、藻岩山、円山、手稲山、三角山など標高約200～1,000mの山々が市街地を囲んでいます。さらに定山渓、芸術の森などを含み、豊かな森林地帯となっています。

豊平峡、定山渓域の山地は新生代新第三紀（1600～1100 万年前）にユーラシアプレート（アムールプレート）の下に太平洋プレートが沈み込むことによって生成された火成岩（主にデイサイト）によって形成され、1200 万年～600 万年前に堆積した海成層「小樽内川層」が一部露出しています。

藻岩山、円山など札幌を取り囲む山々は600万年前以降の火山活動によって形成され、およそ200万年前に活動を休止している火山です。

【南東部 丘陵地・台地】

250万年前以降、札幌付近はプレート衝突による東西圧縮の場となり、褶曲によって野幌丘陵や月寒丘陵などの起伏が形成されました。

約 4 万年前、支笏カルデラ形成の起因となった“支笏火山”の大規模な噴火によって、支笏火砕流が発生し、大量の支笏軽石流が石狩低地帯を覆い、丘陵の麓を埋めるように厚く堆積しました。この軽石流堆積物が高温と堆積による圧力によって強く溶結したものが、南区石山などに見られる支笏溶結凝灰岩（札幌軟石）です。

札幌を広く覆った火山灰は、その後、河川等によって削り、流され、南東部に台地状の月寒台地として残されました。月寒台地の上には望月寒川、月寒川、厚別川、野津幌川などが丘陵の向斜軸に沿ってほぼ南北方向に流れ、下刻したことから、台地上に東西方向に大きく起伏する地形を生み出しました。

【北部低湿地】

札幌北部の大部分は、石狩川下流域、石狩平野の南西端域にあたり、新生代第四紀以降、数回訪れた氷河期において繰り返された氷期の海退と間氷期の海進、および河川の堆積物によって形成された低湿地の沖積平野にあります。今からおよそ6500～6000年前をピークとする温暖期は「縄文海進」と呼ばれ、海岸線が現在よりおよそ5km内陸に入り込み、紅葉山砂丘を形成しました。その後の海退によって低湿地の淡水化が進むと、湿生植物が繁茂して泥炭層を形成し、現在に至ります。

【中央部 扇状地】

南西部山地と南東部丘陵地・台地の間を北部低湿地へと流れる豊平川が作った扇状地です。およそ４万年前以降に真駒内・平岸方面に流れて旧豊平川扇状地（平岸面）を形成し、氷期の明けたおよそ１万年前以降、流路を変えて豊平川扇状地（札幌面）をつくったと考えられています。洪水や河川によって運ばれ堆積した砂礫層と粘土層が重なってできた地形です。

豊平川扇状地の扇頂は真駒内付近の標高約100m、扇端部の北海道大学、札幌駅付近は標高12～13mです。扇端部には、アイヌ民族語で「メム」と呼ばれる湧水の跡が数カ所残っており、現在も北海道大学附属植物園などで見ることができます。

豊平川扇状地は肥沃な土地で地下水が豊富なため、札幌市はこの地域を中心に大きく発展し、市域を拡大していきました。

２． 社会的環境

（１）人口

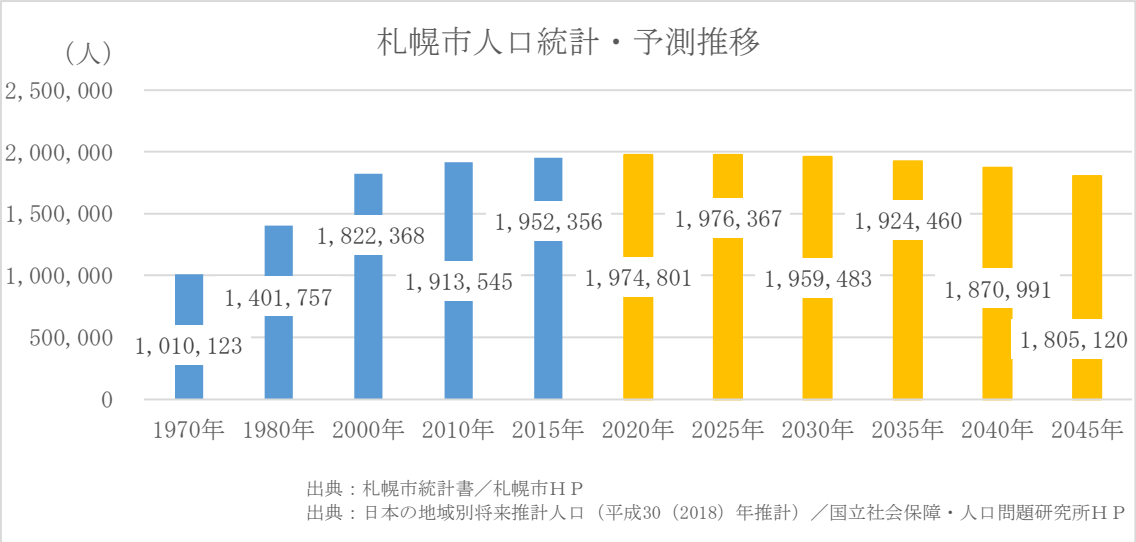
■政令都市・札幌

人口は1,965,784人、952,091世帯（2018年7月1日現在）で、人口規模は全国で5番目（2018年1月1日現在）の日本最北の政令指定都市です。現在札幌市には中央区、北区、東区、白石区、厚別区、豊平区、清田区、南区、西区、手稲区の10の行政区があります。

■今後の予測推移

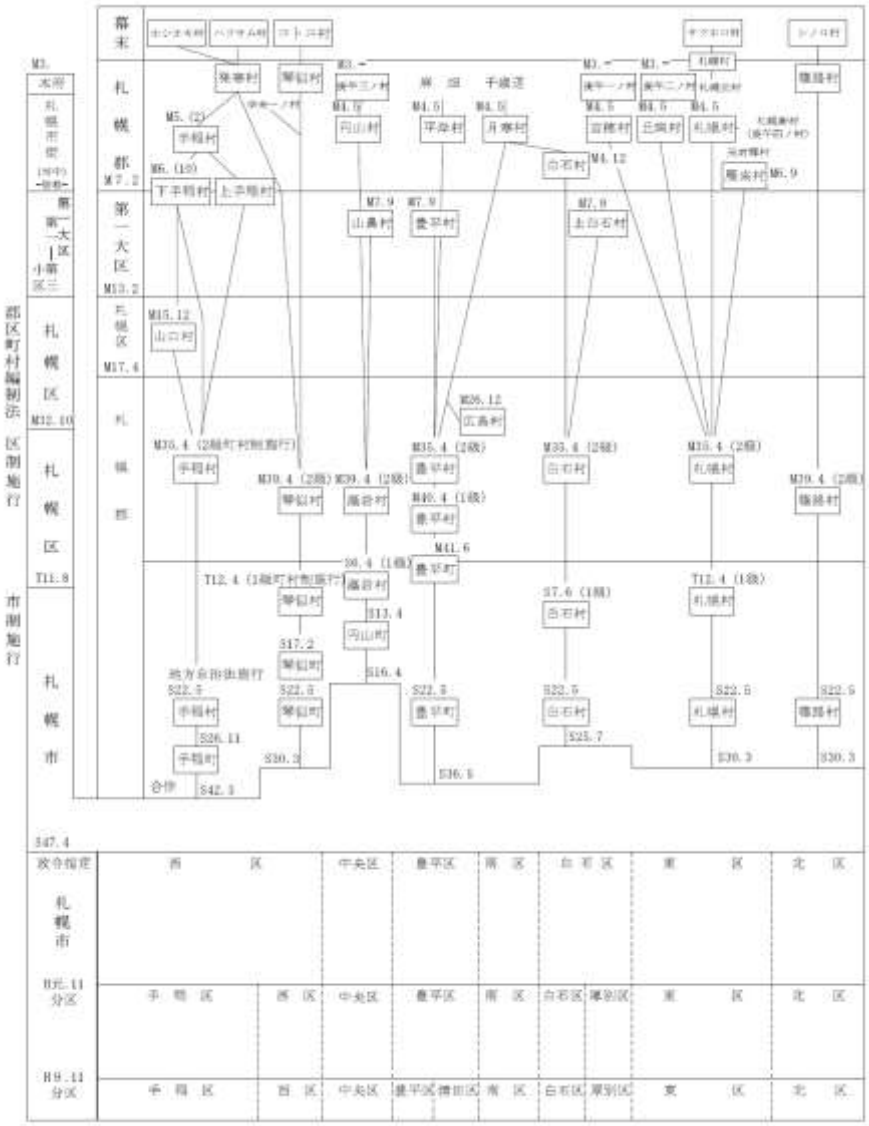
北海道の総人口が平成9年（1997年）をピークに減少している中で、札幌市は小規模ではありますが、いまだ増加傾向にあります。しかし、今後札幌市でも人口が減少に転じることが見込まれており、2025年の197万6,367人をピークに2030年には195万9,483人、2040年には187万991人と予測されています。

また、総人口に占める0-14歳以下の人口の割合が2025年に10.5%、2030年には10.0%、2040年は9.4%と予測され、さらに75歳以上の高齢者の人口の割合は2025年では7.6%、2030年で20.0%、2040年には22.2%と予測され、少子高齢化が進んでいくと考えられています。



（２）市域の変遷

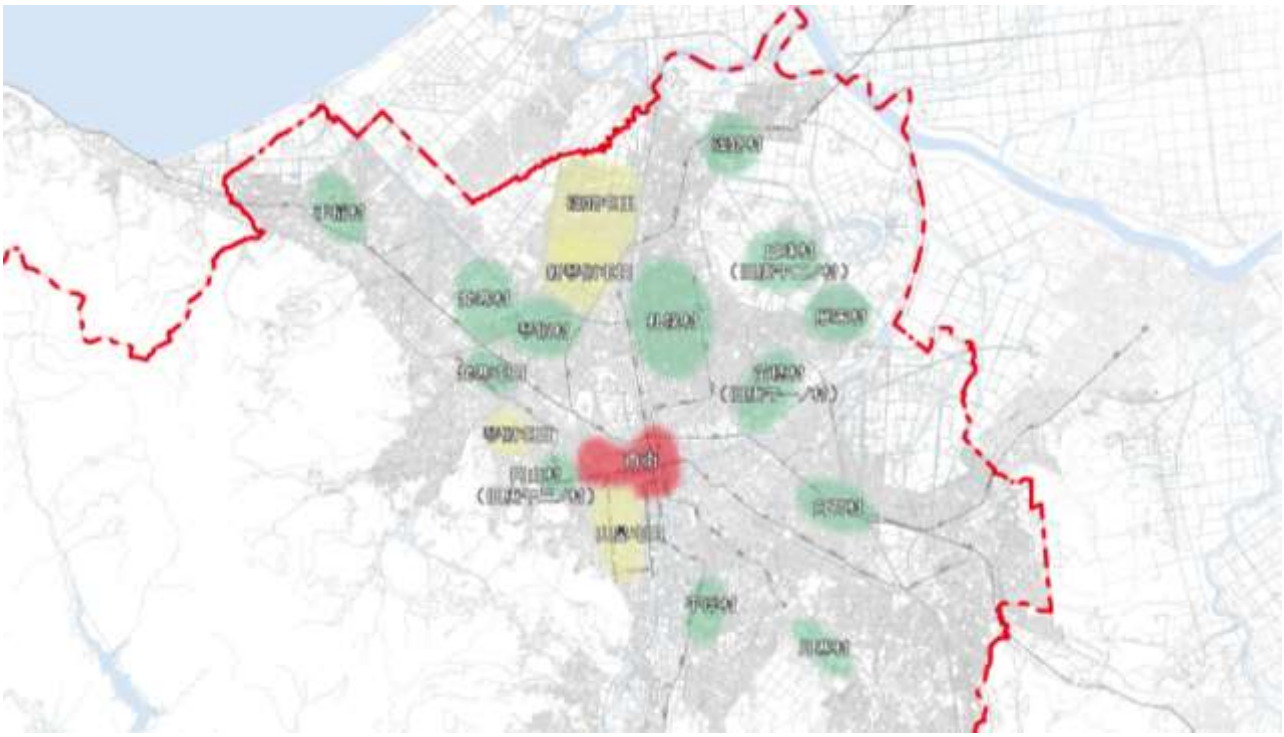
札幌市は、大正11年（1922年）8月1日の市制施行によって誕生しました。市制施行以前から現在の札幌市街地周辺には集落が形成されており、編入・合併によって現在の札幌市の範囲を拡大してきました。現在は中央区、北区、東区、白石区、厚別区、豊平区、清田区、南区、西区、手稲区の10区の行政区で構成されています。



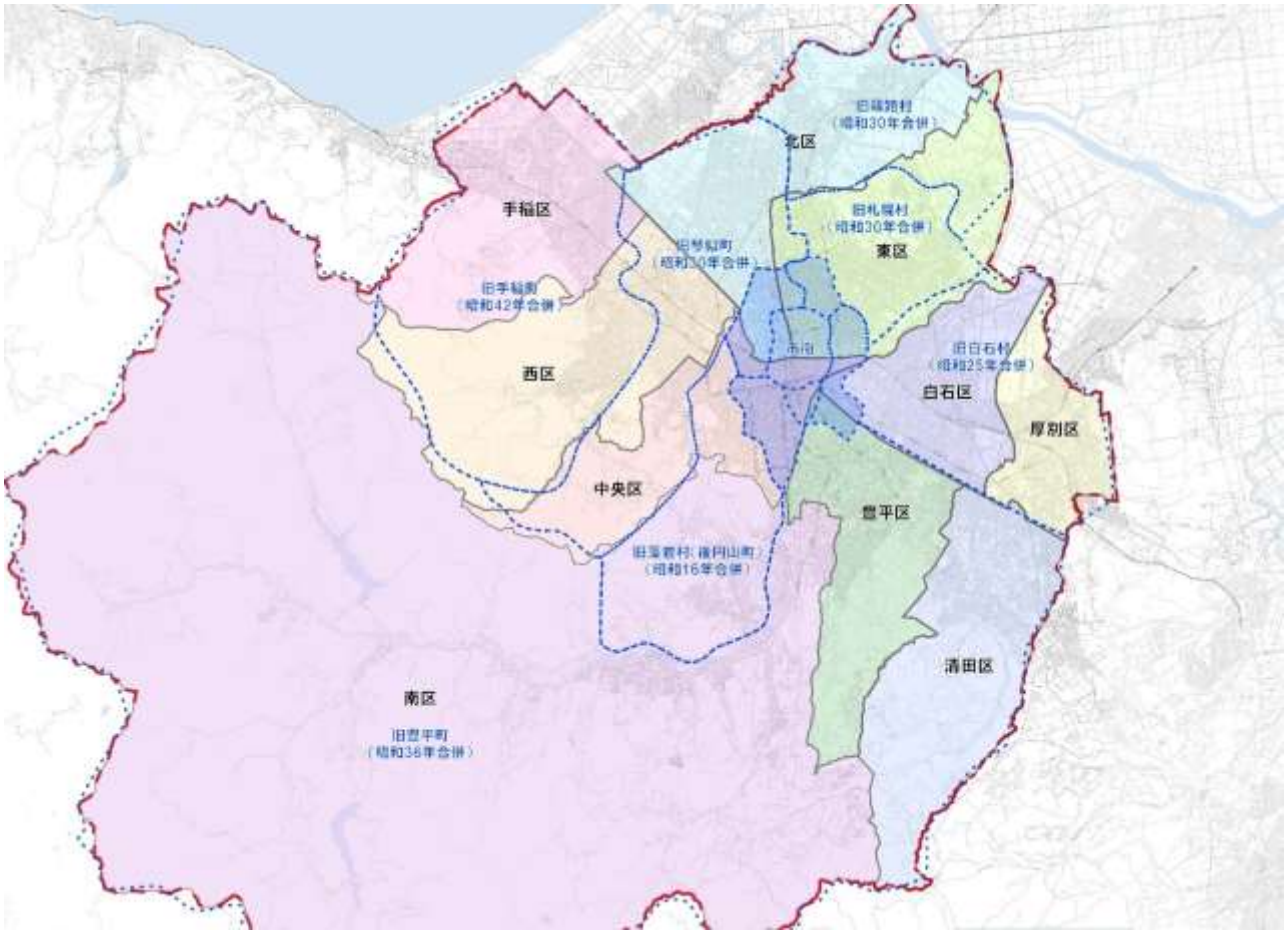
札幌支部及び諸村の変遷図　出典：札幌市政概要

番号	年月日	面積（㎢）	備考
①	明治4年12月	5.492	札幌創建当初
②	15年2月8日	13.472	三県分立当初
③	19年12月31日	14.557	北海道行政区画時代、中島公園の区域編入
④ 区	43年4月1日	24.169	豊平町・白石村・札幌村・藻岩村の一部を編入、区の一部を琴似村に分割
⑤	昭和9年4月1日	29.274	札幌村の一部を編入
⑥	16年4月1日	76.254	円山町と合併
⑦	25年4月1日	76.657	札幌村の一部を編入
⑧	35年7月1日	133.168	白石村と合併
⑨	36年4月1日	135.487	広島村の一部を編入
⑩	39年3月1日	287.666	琴似町・札幌村・篠路村と合併
⑪ 区	39年4月1日	286.666	江別市と交換分合
⑫	39年10月1日	284.15	国土地理院の改測による
⑬	36年5月1日	1,008.67	豊平町と合併
⑭	42年3月1日	1,117.98	手稲町と合併
⑮	48年12月1日	1,118.01	小樽市の一部を編入
⑯	63年10月1日	1,121.18	国土地理院の改測による
⑰	平成3年4月1日	1,121.12	国土地理院の境界修正による
⑱	36年10月1日	1,121.26	国土地理院の計測方法と計測の基礎となる地図の変更による

市域の変遷　出典：札幌市政概要



明治 3～6 年頃の札幌郡　札幌市街と屯田兵村及び周辺村



昭和 9 年（1934 年）ごろの札幌市街地と周辺町村合併の変遷及び現在の区域

■各区の紹介

【中央区】

吉田茂八は、豊平川の渡守として札幌に定住した最初の和人で、安政 4 年（1857 年）、現在の南 4 条東 4 丁目の辺りに定住したと言われています。それから約 9 年後、大友亀太郎により一大行事として大友堀（のちの創成川）が掘られました。

明治 2 年(1869 年)に開拓使が設置され、島義勇判官とその志を受け継いだ岩村通俊判官により、碁盤の目状に整理された現在の中央区の姿がつくられていきました。明治 3 年(1870 年）からは東北地方からの移住が始まり、酒田（山形）から円山地区へ 30 戸、翌年に新潟から山鼻地区へ 40 戸、明治 9 年（1876 年）に山鼻地区へ 240 戸の屯田兵が移住しました。

明治 5 年（1872 年）には丸井今井が建てられ、札幌一番街商店街（南 1 条通り）の誕生となると翌年には狸小路ができるなど市街地の賑わいが生まれていきました。狸小路 4 丁目付近から出火し、全市街地（当時）の五分の一に相当する 887 戸が焼失した明治 25 年（1892 年）の「札幌大火」などの困難を乗り越え、新渡戸稲造による遠友夜学校の開設やガス、上下水道の整備、市電の開通など近代化が進められていきました。中央区のシンボルの一つである路面電車の歴史は古く、大正 7 年（1918 年）に走り始めてから、線路の縮小・延伸を経て現在も新型低床車両ポラリスを導入するなど市民の足として活躍しています。

昭和 47 年（1972 年）に政令指定都市へ移行したのに伴い、中央区が誕生しました。多くの歴史的建造物を残しながらも、札幌市の都市機能の中核として発展し続けています。

【北区】

開拓使が置かれる 10 年ほど前の安政 6 年（1859 年）頃、篠路地区は福島県出身の早山清太郎により入地し、農村として形成されていきました。人々は石狩川河口近くの左岸に位置した札幌の地を、石狩湾から石狩川に入り、内陸に進みながら開拓していきました。

茨戸に住んでいたアイヌ民族の能登酉雄によると「昔大洪水（ポロワッカ）があった。アイヌ民族は、札幌の山（インカルシペ）めがけて丸木舟をこいだ。そしてようよう乾いて広い土地についた。それからそこをサッポロと呼ぶようになった」(『能登酉雄談話』高倉新一郎／北区ＨＰより抜粋）という話が残っています。

明治 4 年（1871 年)、鉄西地区に“私園”ではなく“公園”として日本初の「偕楽園」がつくられました。旧福岡藩の士族・木野束らが石狩川沿いのトウヘツフトと呼ばれていた土地（現 福移）へ移住した明治 15 年（1882 年)、篠路地区に徳島県人滝本五郎らが「興産社」を組織して移住し、藍を栽培しました。

明治 20 年（1887 年）に九州の士族を中心とした屯田兵（新琴似屯田兵）が新琴似に移住、明治 22 年（1889 年）には熊本ほか 6 件から士族の屯田兵が発寒川付近に移住して旧篠路兵村（現 屯田地区）となりました。この地は、札幌で屯田兵によって開拓された最後の土地となり、新琴似屯田兵中隊本部が復元されて屯田兵に関する資料が保存･展示されています。地名として「屯田」が残っているのはこの地区だけです。

明治 30 年（1897 年）に新琴似歌舞伎が、明治 35 年（1902 年）には篠路村烈々布部落で篠路村烈々布素人芝居（のちの篠路歌舞伎）が始まり、貴重な農民文化史となっています。

旧琴似町と旧篠路村は、昭和 30 年（1955 年）に札幌市と合併し、かつて農業・酪農地帯だった地域にも宅地開発等が進みました。昭和 47 年（1972 年)、札幌市が政令指定都市に

移行し、北区が誕生しました。

北区では多くの開拓碑や建築物などを選定し、「北区歴史と文化の八十八選」として保存・活用しており、地域に根付いた文化活動や交流事業による発展を続けています。

【東区】

慶応 2 年（1866 年）、幕府の命を受けた大友亀太郎により、伏籠川のほとり（現在の北 13 条東 16 丁目付近）でイシカリ御手作場として札幌村（後の札幌元村）が形成されました。亀太郎は模範農場として幕府直営農場である御手作場を造って農民を移住させるため、用水路である大友堀（創成川）、道路や橋などを造りました。フシコサッポロ（伏古）川流域に沿って暮らしていたアイヌ民族の人々は、牧士として牧場で働いていたといわれています。

明治 3 年（1870 年）、酒田県（現 山形県）の移民が庚午一ノ村（苗穂村）と庚午二ノ村（丘珠村）に、柏崎県（現 新潟県）の移民が庚午四ノ村（札幌新村）に移住し、明治 6 年（1873 年）、陸前国（現 宮城県）の移民が雁来村に移住しました。こうして苗穂村、丘珠村、雁来村が開村し、東区の母体となる札幌村が形成されていきました。この頃から庚申講という民間信仰が始められ、豊作と家内安全を祈願した移住者たちの想いが垣間見ることができます。また、明治 25 年（1892 年）には、富山県からの移住者による丘珠獅子舞が伝えられています。

徐々に農業が村の主要産業となり、雑穀からリンゴ・ブドウなどの果樹栽培を経て、明治の中頃にはタマネギ栽培が定着しはじめました。また、明治 20 年（1892 年）に軍需用麻製品の製造を目的として北海道製麻会社（現 帝国繊維株式会社）が創立され、その後、大正・昭和にかけて多くの工場が建てられて工業地帯となりました。現在も東区の産業は、農業・工業・商業の三拍子がそろっています。

札幌村は、昭和 30 年（1955 年）に琴似町、篠路村とともに札幌市と合併し、昭和 47 年（1972 年）の札幌市が政令指定都市移行に伴い、東区が誕生しました。

【白石区】

明治 4 年（1871 年）、戊辰戦争で敗れた仙台藩の白石城主・片倉小十郎の家臣たち 600 余人が咸臨丸と庚午丸に乗り、嵐や座礁事故などに遭いながらも北海道を目指しました。望月寒と呼ばれていた地にようやくたどり着いた 67 人が移住し、真冬の寒さに耐えながら現在の国道 12 号沿い（白石公園付近から白石神社までの間）に短期間で住まいを完成させました。その働きぶりに感心した岩村俊通判官によって、「白石村」と命名されました。翌年には村の集会所に、善俗堂という寺子屋式の教育所（旧白石小学校の前身）がつくられました。

明治 12 年（1879 年）に北郷に岩手県人である稲垣岩松が移住、明治 15 年（1882 年）には南郷に岩井沢七兵衛が移住しました。当時は大部分が原始林や湿地に覆われ、エゾシカやエゾオオカミなどの野生動物が多く住んでいました。そのため各村ではヒグマの被害も多く、熊狩りとして屯田兵や村民、アイヌ民族の熊撃ちなどが総出で駆り出されました。一方、明治 17 年（1884 年）には北郷に鈴木煉瓦製造所が建てられ、北海道における本格的レンガ製造業の先駆けとなりました。

当時、北海道では米の栽培はできないとされ畑作を行っていましたが、米食への思いを断ち切ることが出来ず、何度も稲の栽培を試みて明治 16 年（1883 年）にようやく白石村の中央と厚別で水田の施策に成功し、稲作が発展していきました。明治 19 年（1886 年）に菊亭脩季が上白石村に移住して数年間農園を経営しました。現在の菊水という地名は、菊亭の「菊」と、豊平川の「水」にちなんでいると言われています。明治 23 年（1890 年）には米里に本城春蔵らが移住しています。昭和 20 年（1945 年）に、無医村だった白石村に初めて白石村診療所（現 吉田病院）ができ、村民たちの生活を支えました。

明治 35 年(1902 年)、宇都宮仙太郎が白石村上白石（今の菊水 1～3 条 3～5 丁目付近）の 20 ヘクタールの未開 地にサイロなどをもつアメリカ式の牛舎を建て、有畜農業、酪農業の草分けとなりました。北海道の酪農が全国的に有名になったのは、仙太郎が先進的な酪農を実践し、品種改良を行って酪農界を牽引してきたからであり、白石は北海道の先進酪農の発信地となりました。

上白石村の一部を札幌区に編入したり、江別町の一部を編入したりするなどを繰り返したのち、昭和 25 年（1950 年）に札幌郡白石村が札幌市と合併して、札幌市白石町・上白石町・厚別町となりました。昭和 47 年（1972 年）には札幌市が政令指定都市に移行したのに伴い、白石区が誕生、その後、人口増加などにより平成元年（1989 年）11 月に白石区と厚別区に分区しました。

【厚別区】

札幌と幌内炭鉱（三笠市）の間に鉄道が開通した翌年の明治 16 年（1883 年）に、長野県信濃出身の河西由造らが厚別西に、中沢兼三郎らが厚別東に移住しました。明治 18 年(1885 年)には—現在の青葉町ともみじ台を含む下野幌地区に福岡県人の石松弥七と小ケロ石太郎が、上野幌地区には小ケロ石松、石井市郎兵衛、大崎三平、太田鉄五郎らが、大谷地には阿住勘五郎、駒林鉄五郎が移住しました。明治 22 年（1889 年）になると、厚別北と厚別東を含む小野幌地区に、山口県人の秋本槌五郎が移住しました。明治 42 年（1909 年）には小樽の山本久右衛門が私財を投じて農場を開き、水田耕作を中心とした山本地区の開墾が始まりました。

多くの開拓者が厚別地区に入りましたが、小樽や札幌の中心に一旦定住した後に移り住んだ人がほとんどでした。最初は原生林や湿地帯、川の氾濫などに悩まされ、再び厚別の地を離れて行く人も多く、人々がこの地域に定着し始めたのは、最初に移住してから 20 年ほど経った明治 35 年（1902 年）頃だと言われています。

大正 13 年（1924 年）、上野幌地区に出納陽一が経営する宇納牧場（のちに宇都宮仙太郎が経営参加）が開設されました。その後、仙太郎が会長となった「北海道製酪販売組合」が、宇納牧場の製酪所を借り受けて民間初のバター製造を開始しました。デンマークやアメリカの酪農を模範とし、本格的な製造・販売の道を歩んでいきました。

昭和 25 年（1950 年）に白石村が札幌市と合併し、昭和 47 年（1972 年）、札幌市が政令指定都市に移行するのに伴って白石区となりました。その後、平成元年（1989 年）11 月に人口増加により、白石区が厚別川を境界の基本線として分区し、東側に厚別区が誕生しました。

【豊平区】

安政 4 年（1857 年）、札幌越新道が開削され、通行屋（休憩・宿泊施設）の建設が始まるとともに、札幌市内最初の和人居住者の一人といわれる志村鐵一が豊平に定住しました。明治 4 年（1871 年）、岩手県人が月寒、平岸、福住に移住し、翌年に月寒村と平岸村が、明治 7 年（1874 年）には豊平村が開村しました。さらに翌年、技師ホルトの設計による豊平橋が完成しました。

平岸村はリンゴの栽培などで、豊平村は室蘭街道（現 国道 36 号）から札幌区に入る玄関口として栄えていきました。農業を中心とした村であった月寒村は、明治 29 年（1896 年）に当時の陸軍第七師団独立歩兵大隊（後の歩兵第二十五連隊）の兵営が設置され、軍都としての顔も併せ持ちました。明治 42 年（1909 年）には、第二十五連隊用に札幌初の水道が完成しています。

明治 35 年（1902 年）には豊平・月寒・平岸の 3 村が合併して豊平村が誕生し、明治 41 年（1908 年）には豊平町と改称されました。明治 44 年（1911 年）、平岸と月寒を結ぶ連絡道路として平岸連絡線が完成し、この建設に従事した第二十五連隊の兵士たちに月寒あんぱんが配られたことから、アンパン道路と呼ばれるようになりました。

平岸には天神山遺跡・東山遺跡・平岸坊主山遺跡の三つの縄文遺跡があります。その一部だった羊ヶ丘は、1906(明治 39)年に農商務省月寒種牛牧場（現 北海道農業研究センター）、その後月寒種羊場が設置されました。また、天神山にある相馬神社の付近には、アイヌ民族のチャシ（山砦）跡があります。この「天神山チャシ跡」は、「発寒チャシ跡」（西区山の手）とともに札幌で 2 ヶ所のみ確認されています。

定山渓鉄道の完成や宅地化が進み、シンガポールに輸出されるほど栄えた平岸のリンゴ栽培も徐々に姿を消していきました。昭和 36 年（1961 年）、豊平町は札幌市と合併し、昭和 47 年（1972 年）の札幌市政令指定都市への移行に伴い、豊平区が誕生しました。

【清田区】

木村某という人物が、現在の真栄通の辺りで通行屋（駅逓）を営んでいましたが、明治 6 年（1873 年）、月寒開拓団の一人であった長岡重治が“あしりべつ”（清田区の中心部）に最初に居住したと言われています。明治 11 年（1878 年）には長岡徳太郎が通行屋を営み、豊

平村は札幌市東南部の玄関口として利用されました。

明治 24 年（1891 年）に吉田善太郎らが厚別川に用水路（吉田用水）を建設し、徐々に居住者が増えていきました。明治 34 年（1901 年）頃には、苦労の末に北海道で初めて米作りを成功させた中山久蔵が、改良した赤毛米という種もみを長岡重治など開拓農民に無償で分けました。そのおかげもあり、稲作や畑作が定着して集落を作り、厚別（ありしべつ／現 清田・北野・平岡・真栄の総称）、三里塚（現 里塚）、公有地（現 有明）と呼ばれるようになり、翌年には豊平村、月寒村、平岸村の 3 村が合併して豊平村に、明治 41 年（1908 年）には豊平町と改称されました。

明治 18 年（1885 年）に創設された厚別（あしりべつ）神社は、穀物の豊作と村人の安全を願い、長岡重治らによって建てられました。

大正 10 年（1921 年）頃には平岡、里塚ではリンゴ栽培が始まり、昭和 35 年（1960 年）頃まで続きました。稲作技術の改良も進み、厚別川周辺には水田が広がり、畑作地帯では酪農も始まりました。

昭和 36 年（1961 年）、豊平町が札幌市と合併、昭和 47 年（1972 年）の札幌市政令指定都市への移行に伴い、豊平区が誕生しました。人口増加に伴い、平成 9 年（1997 年）に豊平区から分区し、清田区が誕生、「清田」という地名は、昭和 19 年（1944 年）、字名改正により、「美しい清らかな水田地帯」という意味でつけられました。

【南区】

宝暦 3 年（1753 年）、木材業者・飛騨屋久兵衛によって豊平川沿いの山林伐採が開始され、慶応 2 年（1866 年）には美泉定山がアイヌ民族の人々の案内で温泉を発見し、東久世によってこの地が定山渓と名付けられました。

明治 3 年（1870 年）、尾去別（おさるべつ）から平岸までの道路開削が始まりました。これは徳川家側だった東本願寺と新政府との間で交わされた、誓書の代償としての北海道の防備（道路開削）であり、約 105 ㎞の難工事は 1 年 3 ヶ月という短い期間で完成しました。明治 5 年（1872 年）には簾舞通行屋（駅逓）が置かれ、屋守の黒岩清五郎が定住しました。同年、軟石（支笏噴火溶結凝灰岩）が発見され、明治 8 年（1875 年）からは石山で本格的な採掘が始まりました。大正時代にコンクリートが登場するまで、その人気は非常に高いもので、現在では貴重な石材となっています。明治 9 年（1876 年）、お雇い外国人だったエドウィン・ダンが真駒内に牧牛場（後の真駒内種畜場）を開き、家畜飼育の試験や指導、亜麻などの栽培、西洋農具の技術指導、乳製品の製造や食肉の加工指導などを行い、北海道における畜産業の発展に大きく貢献しました。明治 13 年（1880 年）から徐々に藻岩下、澄川、藤野、常盤、駒岡への移住がはじまり、明治 31 年（1898 年）には紀伊出身の屯田兵だった小村亀十郎を中心に、現在の白川の基礎づくりが始まりました。大正に入ってからも開拓農家は熊の出没におびえ、部落のハンターや日高から熊とりの名人と呼ばれたアイヌ民族によって射止められました。

大正 7 年（1918 年）には白石から定山渓まで 6 駅 29.9 ㎞の鉄道が開通し、「定鉄」と親しまれた定山渓鉄道は、札幌軟石や木材などの輸送や人々の生活の足として昭和 44 年（1969 年）までの約半世紀にわたり活躍しました。

昭和 21 年（1946 年）、真駒内種畜場が米軍に接収されて、第 11 空挺師団が基地「キャン

プ・クロフォード」に駐留し、返還後は自衛隊の駐屯地となっています。

昭和 36 年（1961 年）に豊平町が札幌市と合併、昭和 47 年（1972 年）の札幌市政令指定都市への移行に伴い、南区が誕生しました。

【西区】

安政 4 年（1857 年）、山岡精次郎、大竹慎十郎、永田休蔵ら幕府旗本の武士 20 人と従者たちが発寒の稲荷通沿い付近に移住し、農作物を栽培しながらの開拓を始めました。明治 4 年（1871 年）には越後から森三吉らがベッカウス（現西野）に、開拓使がつくった辛未一ノ村（しんぴいちのむら）の 44 戸からそれぞれ八軒、十二軒（現中央区宮の森付近）、二十四軒に移住し、さらに翌年には仙台藩白石城主・片倉小十郎の家臣らが宮の沢地区に移住しました。開拓使の試験場・偕楽園が現在の清華亭付近から琴似村境までにつくられ、サクシュコトニ川流域に沿った周辺（園内）に暮らしていたアイヌ民族は琴似村に、発寒川の右岸に暮らしていたアイヌ民族は発寒村に属することになりました。彼らは人足や人夫として雇われ、明治初期の札幌は交通・土木・運輸等の労働力をアイヌ民族の人々に依拠していました。明治 7 年（1874 年）に屯田兵例則が制定されると、明治 8 年（1875 年）には宮城県の仙台亘理藩、青森県の斗南藩、山形県の庄内藩の士族たちが琴似地区（現 琴似本通沿い）に、翌年には発寒地区（現 稲荷線沿い）に移住しました。明治 19 年（1886 年）までには春木屋孝造ら山口県人が平和地区に、前鼻村七ら広島県人が西野地区に、さらに伊藤太治兵衛ら福井県人が福井地区に移住し、荒れ地に発寒川などの水を引いて農業用水路を完成させるなど、札幌で有数の米作地帯を築き上げていきました。

主に旧仙台藩士や旧会津藩士からなる琴似屯田兵は、当時、琴似屯田兵村として琴似地区（現 西区役所、琴似神社付近）に第一大隊第一中隊本部が置かれ、射撃訓練場や 208 戸の屯田兵屋が建てられました。屯田兵制度が廃止される明治 37 年（1904 年）まで彼らによる開拓は進み、発寒・八軒地区の牧畜、山の手地区の畑作など地域の特性を生かした農業が行われ、現在の西区の基礎を築いきました。

大正 14 年（1925 年）、北海道農事試験場が札幌区北 18 条から八軒の琴似発寒川沿いに移転設置され、その跡地は現在農試公園として幅広く利用されています。

昭和 17 年（1942 年）、町制施行により琴似村が琴似町、昭和 26 年（1951 年）には手稲村が手稲町となり、昭和 30 年（1955 年）には琴似町が札幌市と合併し、さらに昭和 42 年（1967 年）に手稲町が札幌市と合併しました。昭和 47 年（1972 年）の札幌市政令指定都市への移行で西区が誕生したが、人口の増加により平成元年（1989 年）、西区から手稲区が分区しました。

【手稲区】

安政 4 年（1857 年）、中川金之助、中島彦左衛門らが下手稲村星置に住み出したと言われています。明治 5 年（1872 年）、上手稲村（現宮の沢、西宮の沢、西町、西野、平和の付近）に仙台藩白石城主・片倉小十郎の家臣である三木勉が移住し、時習館（現手稲東小学校の前身）を建設しました。この頃からサンタロペツ（現富丘）通行屋（駅逓）や軽川（がるがわ／現 手稲本町）は、小樽から札幌への物資輸送の重要な基点でした。明治 14 年（1881 年）

には山口県人の宮崎源次右エ門と野村葆が移住して山口村を開き（現山口）、明治 17 年（1884 年）には広島県人が山口村（現星置）に移住しました。

明治 15 年（1882 年）、トノサマバッタの大群が札幌に飛来し、農作物に大きな被害をもたらしました。駆除のため、バッタやその卵を集めて土に埋め、さらに大きな土まんじゅうを作り、「手稲山口バッタ塚」が作られました。明治 19 年（1886 年）に新川大排水（現 新川）が開削され、農耕地の開拓が進んでいきました。明治 27 年（1894 年）には旧加賀藩主・前田利嗣が軽川（現・前田）に前田農場を設立し、酪農を始めました。また、小樽の稲積豊次郎が現・稲積で稲積農場を始め、でんぷん工場の経営や飼料作物や水稲などの栽培を行いました。山口地区では、大正 7 年（1918 年）頃から砂地を生かした山口スイカが評判になりましたが、昭和 55 年（1980 年）の大冷害により損害を受け、冷害に強いカボチャの栽培が始められ「大浜みやこ」が誕生しました。

明治 45 年（1912 年）、小学校の教師と子どもたちによって新川流域で手稲遺跡が発見、本格的な発掘調査の結果、縄文時代のものであり、出土した土器は「手稲式土器」と呼ばれるようになりました。

明治 24 年（1891 年）、星置で農業をしていた鳥谷部弥平治が偶然金鉱脈を発見し、その後石川貞治が鉱業権を取得して手稲鉱山として開発を始めました。昭和 3 年（1928 年）に広瀬省三郎が権利を得て、さらに昭和 10 年（1935 年）、三菱鉱業と共同経営を開始しました。しかし次第に衰退し、昭和 46 年（1971 年）に閉山しました。

昭和 42 年（1967 年）、手稲町は札幌市と合併、昭和 47 年（1972 年）の札幌市政令指定都市への移行に伴い、西区が誕生しました。その後人口増加により、平成元年（1989 年）に西区から手稲区が分区しました。

（１）交通

○ 道路交通

■距離・国道

札幌市の道路は平成29年（2017年）度現在で国道190.3km、道道239.8km、市道5,274.1kmで、総延長は5,704.2km、舗装率は99.5%です。

札幌市と函館市を結ぶ国道5号や、旭川市とを結ぶ国道12号、室蘭市とを結ぶ国道36号などを有します。

■道路状況

格子状の街中心部を囲むように環状道路があり、さらに環状道路を中心として東西南北に放射道路が広がっています。波状の道路や緑豊かな道路は、札幌市の特徴的な景観を形成しており、主要幹線道路網「2高速・3連携・2環状・13放射道路」の整備を強化していく方針で都市計画を進めています。

2つあるうちの内側の環状道路が最も交通量が多く、次いで外側の環状道路、北方面に広がる放射道路（国道231号）の順に多くなっています。

■自動車保有台数

札幌市内の自動車保有台数は、平成29年（2017年）3月現在で102万9,597台という過去最高の台数となっており、6年連続で増加しています。

○ 地下鉄

■地下鉄の開業

昭和46年（1971年）12月に南北線【北24条～真駒内】間の12.1㎞が開業し、順に東西線【琴似～白石】、南北線【麻生～北24条】、東西線【白石～新さっぽろ】、東豊線【栄町～豊水すすきの】と【豊水すすきの～福住】、最後に平成11年2月に東西線【宮の沢～琴似】駅が開業しました。

■各地下鉄の特徴

南北線は麻生駅から真駒内駅まで全長14.3㎞で16の駅があり、最長所要時間は16分です。平岸～真駒内駅間にはシェルターで覆われた約4.5㎞の高架部があり、地下鉄ではあるが外の景色が見えるという特徴があります。

東西線は宮の沢駅から新さっぽろ駅まで全長20.1㎞で19の駅があり、最長所要時間は35分です。全線の中で最も長く、駅数も多いです。

東豊線は栄町駅から福住駅までの全長13.6㎞で、14の駅があります。

■地下鉄の利用者

1日の平均乗車人数は平成28年（2016年）度で、南北線が23万3,749人、東西線が23万4,060人、東豊線は15万2,136人でした。毎日約62万人が利用していることとなり、各駅とも年々利用者が増えています。

■地下鉄の経営

平成28年（2016年）度の収益収支は11年連続の黒字となっており、順調な経営を続けています。

○ バス

■バス事業の歴史

札幌市のバス事業が始まったのは、昭和5年（1930年）。市域が拡大され、昭和46年（1971年）に地下鉄が開業し、さらに延伸されるのに併せて、バス路線の再編成が行われてきました。しかし、利用者の減少と平成14年（2002年）2月からの乗合バス規制緩和実施などにより、札幌市営バスの経営状況は悪化しました。民間へ路線を移行した後、平成15年（2003年）度末にバス事業を廃止し、74年間の歴史を閉じました。

■現在のバス運営

札幌市内の路線バスは民営の5社（中央バス、ＪＲバス、じょうてつバス、夕鉄バス、道南バス）で運行されています。平成28年（2017年）度現在、各民営バス会社が占める1日平均乗車人数の割合は、中央バスが57.6％で半分以上を占め、続いてＪＲバス29.3％、じょうてつバス12.7％、夕鉄バス0.2％、道南バス0.2％となっています。

■バス利用者と今後の状況

1日の平均乗車人数は、平成10年（1998年）度で約36万4,000人、平成20年（2008年）度では約30万人でした。しかし、平成22年（2010年）度以降は30万人をきり、平成28年（2016年）度では約29万人となっています。ここ数年はあまり大きな増減はありませんが、バス事業者は厳しい経営状況を強いられており、札幌市はバス事業者への赤字路線運行の補助など、路線バス維持のための対策に取り組んでいます。

○ 市電（路面電車）

■市電の登場

大正7年（1918年）、開道50年記念博覧会が開催される中、札幌電気軌道株式会社による札幌市内で初めての電車が走りました。雪を巻き上げながら走り、冬の風物詩としてしられるササラ電車（除雪車）は、大正14年（1925年）に登場しました。

■市電路線の拡大と縮小

昭和2年（1927年）に札幌市が事業を譲り受け、市営の電車として8系統16.3km、車両数63両で運行を開始しました。市域の拡大に併せて路線も拡大し、昭和39年（1964年）には新琴似駅前方面や円山公園、豊平駅前、苗穂駅前方面の路線も含み、総延長が約25kmにまでなりました。

他の交通機関の開業などで乗客の減少による経営状況の悪化も危ぶまれるようになり、次第に路線を縮小していきました。西4丁目～すすきの間の1系統8.47km車両数56両となったのは、昭和49年（1974年）5月でした。

その後、市電は利用者の増減を繰り返しており、1日平均乗車人数は平成5年（1993年）度の2万5,471人を境に年々減少し、平成22年（2010年）度は過去最低の2万359人でした。

■市電の高度化と利用者

市電の存続とまちづくりへの活用の検討を図る中、平成25年（2013年）に国土交通省によって「札幌市軌道運送高度化実施計画」が認定されました。これにより、平成27年（2015年）12月20日には路線がループ化（環状化）され、「内回り（反時計回り）」と「外回り（時計回り）」の1系統8.9km車両数33両の運行が始まりました。路線のループ化に伴い、市電が歩道のすぐ横を走るため、歩道から直接乗車できる「サイドリザベーション方式」を採用、また、バリアフリー対応の新型低床車両（愛称ポラリス）の導入や停車場の設置などが進められています。

ループ化によるためか、平成28年（2016年）度の1日平均乗車人数が2万4,871人となり、平成8年（1997年）度と同等の乗車人数となりました。

今後も市電の高度化事業と活用計画による経営の安定化が図られていきます。

○ 鉄道

■鉄道の開通

明治13年（1880年）11月、北海道の開拓として、石炭を輸送するため、小樽市手宮～札幌間で道内初の鉄道が開通し、明治15年（1882年）11月に札幌～三笠市幌内がつながり全面開通しました。

鉄道は、明治政府の資金難により民間主導で建設・運営され、道内初の幌内鉄道は北有社が運行、明治22年（1889年）には北海道炭礦鉄道（北炭）が経営することとなりました。その後、明治39年（1906年）3月に「鉄道国有法」が公布され、明治29年（1896年）5月の「北海道鉄道敷設法」により北海道庁が建設・運営を担うこととなっていきました。

■国鉄時代

昭和 24 年（1949 年）6 月に日本国有鉄道（国鉄）ができたが、昭和 62 年（1987 年）4 月に分割民営化が図られ、ＪＲ東日本、ＪＲ東海、ＪＲ西日本などとともにＪＲ北海道（北海道旅客鉄道株式会社）が誕生しました。国鉄時代の赤字路線は廃止され、北海道内の鉄道は縮小されていきました。

■札幌駅再開発計画

昭和 63 年（1988 年）、札幌駅、桑園駅、琴似駅が道内で初の高架駅となり、それをきっかけに札幌駅の再開発計画をスタートさせ、平成 2 年（1990 年）、現在 5 代目の駅舎である札幌駅が全面開業しました。また、同年から順に商業施設がオープンし、平成 15 年（2003 年）に複合商業施設ＪＲタワーが誕生しました。新千歳空港からのアクセスの便利さもあり、札幌駅は国内だけではなく、海外からの旅行客の利用も多くなっています。

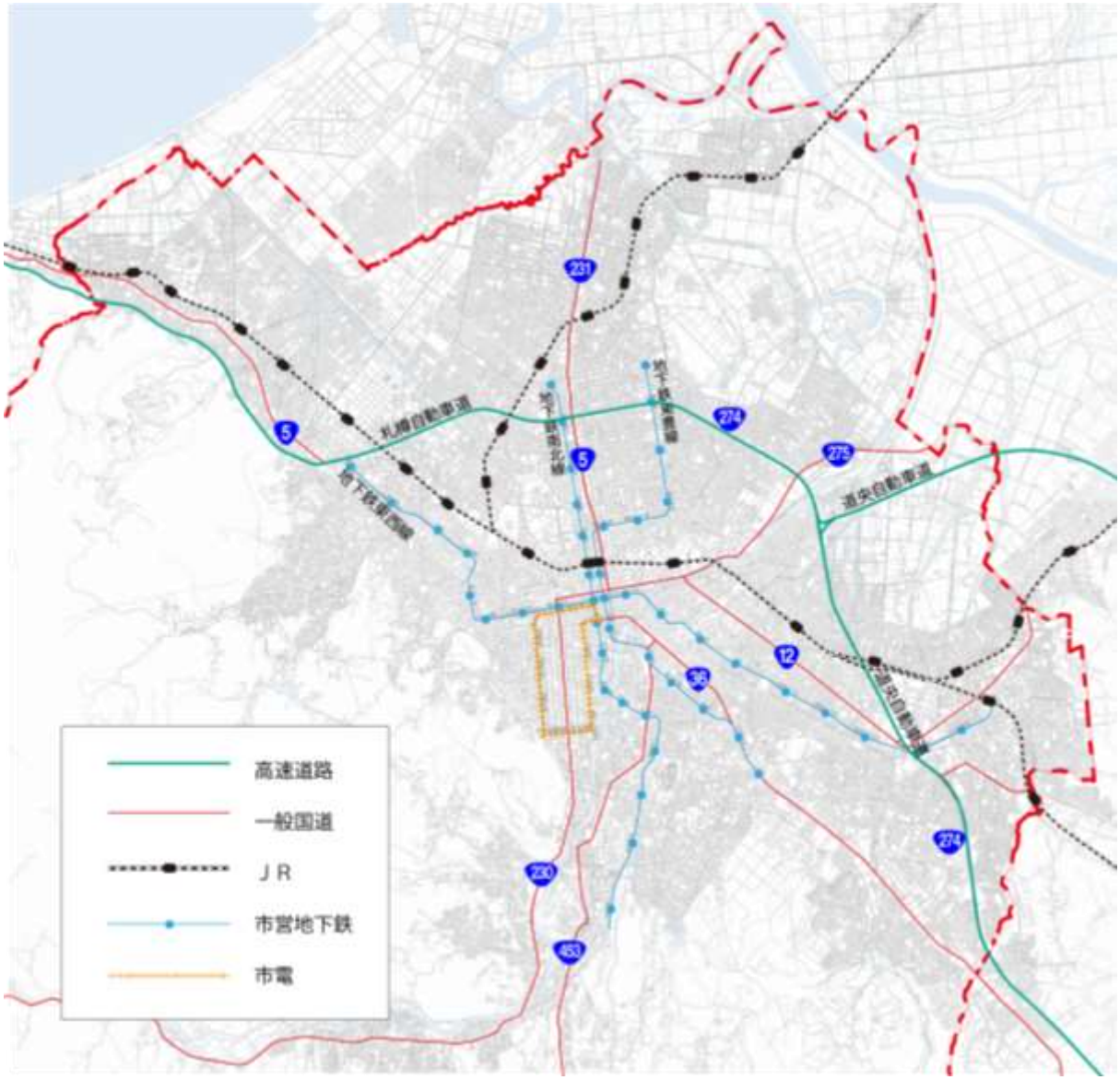
■ＪＲ北海道の利用者

札幌市内を走る鉄道は 26 駅あり、ＪＲ函館線の 27.5 ㎞、ＪＲ千歳線の 8.0 ㎞、ＪＲ札沼線 15.1 ㎞、計 50.6 ㎞である。札幌～ほしみ、札幌～森林公園（ＪＲ函館線）、札幌～上野幌（ＪＲ千歳線）、札幌～あいの里公園（ＪＲ札沼線）の 4 路線があり、平成 28 年（2016 年）度の 1 日平均乗車人数は、9 万 7,652 人の札幌駅が道内で最も多く、札幌市内で次に多いのは手稲駅の 1 万 5,589 人、新札幌駅の 1 万 4,267 人でした。

札幌市内全体の 1 日平均乗車人数を見ると、平成 15 年（2003 年）度は 17 万 9,280 人、平成 20 年（2008 年）度は 19 万 4,669 人、平成 23 年（2011 年）には 20 万人を超え、平成 28 年（2016 年）度は 21 万 8,894 人と、年々利用が増加しています。

■今後のＪＲ北海道

2030 年度末に全面開業予定の北海道新幹線が開通すれば、さらに利用客が増えるとみられます。しかし、北海道全体の鉄道事業を担うＪＲ北海道の経営状況は依然厳しい状況であります。



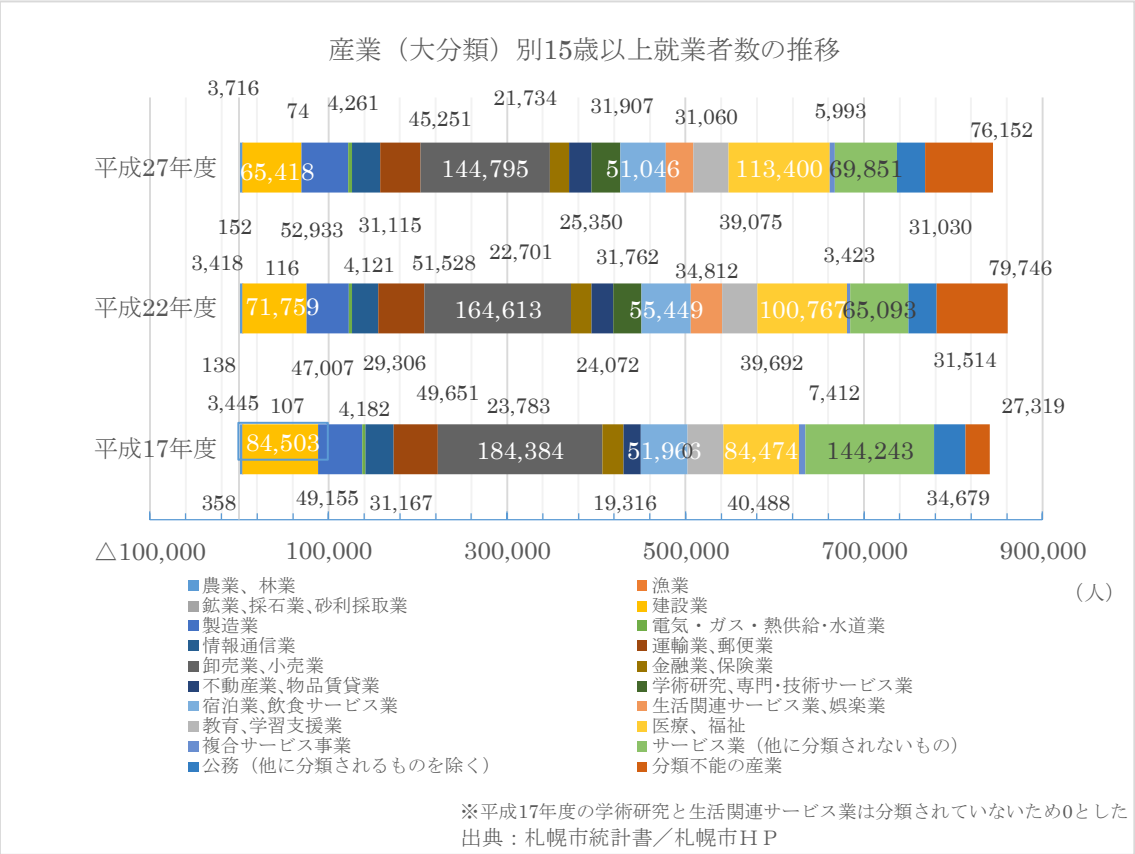
（２）産業

札幌市の15歳以上の産業別就業者の推移を見てみると、卸売業やサービス業などの第3次産業の就業者が多く、農林水産業の第1次産業が最も少なくなっています。

平成22年（2010年）度に比べると平成27年（2015年）度の第一次産業は、農業・林業就業者が300人ほど増えていますが、漁業就業者は3割ほど減っています。

第二次産業では、建設業就業者が年々減少しており、製造業などは増加しています。

第三次産業の総就業者は、5年ごとに1万人以上減少しており、そのなかでも卸売・小売業が年々減少しています。不動産業就業者や医療・福祉関係の就業者が増加傾向にあります。



■産業（大分類）別15歳以上就業者の推移

	第１次産業	第２次産業	第３次産業	分類不能の産業
平成 17 年度	3, 552 人	134, 016 人	675, 745 人	27, 319 人
平成 22 年度	3, 534 人	118, 904 人	658, 853 人	79, 746 人
平成 27 年度	3, 790 人	118, 503 人	645, 868 人	76, 152 人

出典：札幌市統計書（平成29年版）

札幌市内の企業の9割以上が中小企業であり、札幌の経済を支えている重点分野は「食」「観光」「環境」と考えられています。さらに今後は「健康・福祉」も重要な分野の1つに加えられると考えられています。

＜「食」＞

北海道の豊富な食材を活用した安全・安心の確保、食ブランドの形成と地産地消だけではなく道外・海外への進出を図り、魅力のある札幌の産業へと発展しています。

第一次産業就業者における高齢化や後継者不足などの課題がある中、第一次産業就業者が北海道の農水畜産物を加工し（第二次産業）、流通・販売（第三次産業）にも関わっていくという第6次産業化への新たな取り組みを進めています。

＜「観光」＞

豊かな緑と新鮮な食材を有する札幌市ではありますが、YOSAKOIソーラン祭りやさっぽろオータムフェスト、さっぽろ雪まつりなどの観光行事がさらに旅行客を呼んでいます。また、ここ数年は海外からの観光客やコンベンションなどが増加し、観光案内所や案内ボランティア、観光案内版の充実を図るとともに、魅力的な観光都市づくりのためのまちづくりを図っています。

＜「環境」＞

平成20年（2008年）6月25日、札幌市は地球環境問題への対応を札幌市政の最重要課題の一つと位置付け、札幌市民一人一人がこれまで以上に地球環境保全に取り組んでいくという「環境首都・札幌」を宣言しました。

積雪寒冷地である札幌市の市民生活のスマート化、エネルギー分野の活性化などを図る「札幌型環境・エネルギー技術開発支援事業」、企業のエネルギー使用量の削減など「札幌型省エネルギービジネス創出事業」として、環境産業の取り組みを進めています。

＜「健康・福祉」＞

超高齢化社会へと進んでいく中で、障がい、介護等の福祉関連産業だけではなく、スポーツなどの健康への取り組みも重要な分野となっています。

札幌市の豊富な食材を使った機能性食品の開発やサービスの従業者の育成などが必要とされ、札幌市としての支援事業に取り組んでいます。

大学や研究機関との提携によるバイオ産業の発展を図る「バイオ産業販路拡大・連携促進事業」や研究者の育成や支援を行う「健康関連産業研究開発支援事業」、「健康関連産業ビジネスモデル構築支援事業」、「医療関連産業集積促進事業」といった事業を進め、今後の発展へとつなげています。

（参考）

第一次産業：農業・林業・水産業

第二次産業：鉱工業・製造業・建設業

第三次産業：卸売業・小売業・金融業・保険業・不動産業・運輸業

第四次産業：情報産業・ＩＴ・図書館・政府・文化団体など

第五次産業：ＮＰＯ団体・メディア・芸術・ヘルスケア・科学技術など

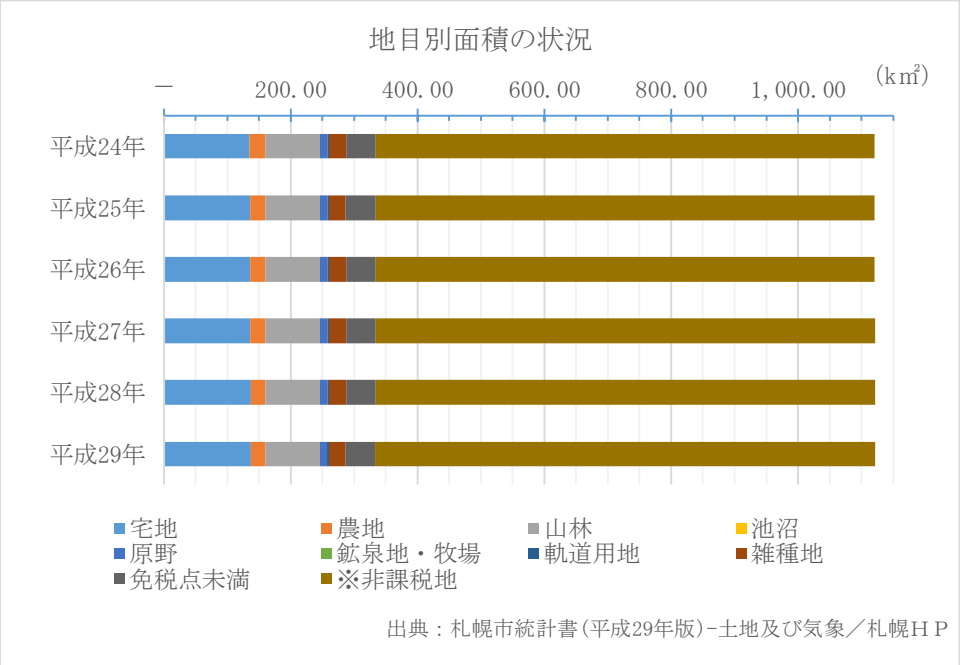
第六次産業：第一次産業者が第二次（食品加工）・第三次（流通・販売）にかかわる

（３）土地利用

札幌市の土地利用状況を見ると、山林や原野など、豊かな自然が多いことがわかります。

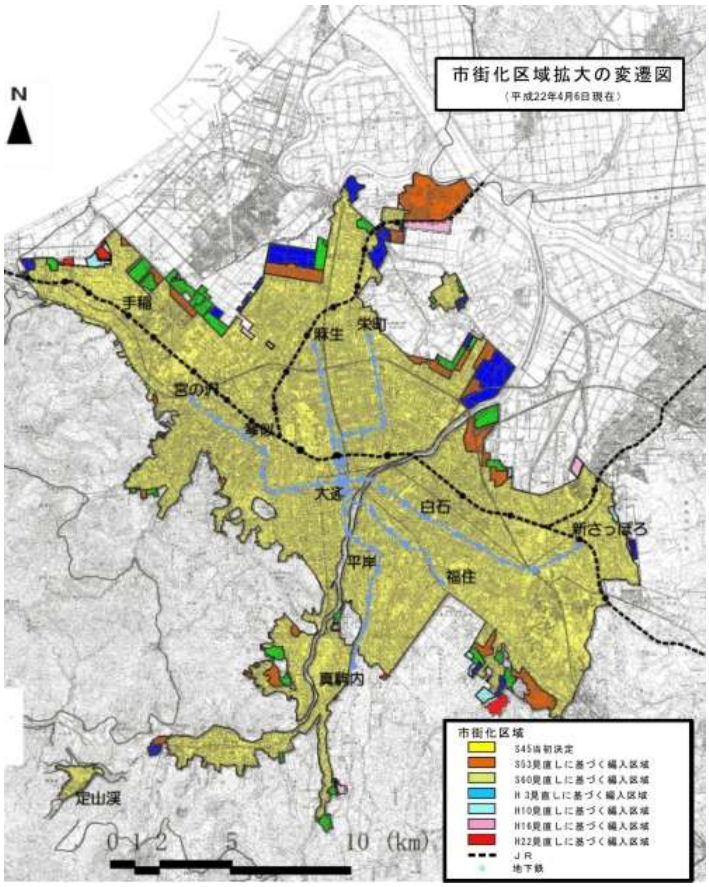
札幌市全市域は1,121.12㎢あり、そのうち南西部の国有林を除く567.95㎢、全市域の約50.7%が都市計画区域となっています。

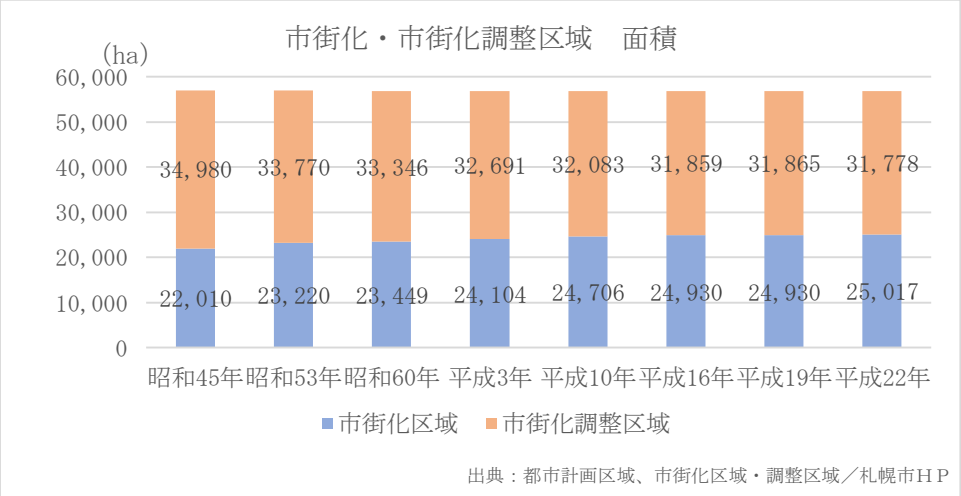
札幌市の景観や地形の特性、自然環境などを踏まえ、住宅市街地、札幌市中心部、工業地・流通業務地、幹線道路等沿道への土地利用の見直しも行いつつ、魅力ある都市づくりを目指しています。



地目別面積の状況（土地利用状況）

	宅地	農地	山林	池沼	原野	鉱泉地・牧場	軌道用地	雑種地	免税点未満	※非課税地
平成24年	135.39	24.64	86.29	0.05	12.02	0	2.11	26.80	46.94	786.88
平成25年	135.73	24.19	86.17	0.04	11.88	0	2.11	26.87	47.13	787.00
平成26年	136.08	23.91	86.14	0.04	11.92	0	2.11	26.92	46.96	787.04
平成27年	136.35	23.62	85.95	0.04	11.96	0	2.11	27.16	46.57	787.50
平成28年	136.67	23.15	85.96	0.04	12.09	0	2.10	27.34	46.34	787.55
平成29年	137.12	22.71	85.86	0.04	11.92	0	2.10	27.10	46.09	788.32


市街化区域拡大の変遷図
（平成22年4月6日現在）
N
手稲
麻生
栄町
宮の沢
琴似
大通
白石
新さっぽろ
平岸
福住
真駒内
定山渓
0 1 2 5 10 (km)
市街化区域
S45当初決定
S53見直しに基づく編入区域
S60見直しに基づく編入区域
H 3見直しに基づく編入区域
H10見直しに基づく編入区域
H16見直しに基づく編入区域
H22見直しに基づく編入区域
ＪＲ
地下鉄


市街化・市街化調整区域　面積
(ha)
60,000
50,000
40,000
30,000
20,000
10,000
0
34,980
33,770
33,346
32,691
32,083
31,859
31,865
31,778
22,010
23,220
23,449
24,104
24,706
24,930
24,930
25,017
昭和45年
昭和53年
昭和60年
平成3年
平成10年
平成16年
平成19年
平成22年
市街化区域
市街化調整区域
出典：都市計画区域、市街化区域・調整区域／札幌市ＨＰ

３． 歴史的環境

札幌の歴史的環境について時代ごとに以下に整理します。なお、時代区分は「札幌市埋蔵文化財センター」において整理している年表を参考にします。ただし、本構想では、「アイヌ民族文化期」の表記はしないこととします。

おもなできごと（日本列島）	本州の時代区分	年代	北海道の時代区分※	おもなできごと（北海道）
槍の使用がはじまる	旧石器文化	20000年前	旧石器文化	北海道に人が住みはじめる 細石刃文化が広がる
		16000～15000年前		
土器の使用がはじまる 竪穴住居がつくられはじめる 弓矢の使用がはじまる 土偶がつくられはじめる	縄文文化 草創期		縄文文化 草創期	北海道で土器の使用がはじまる
気候の温暖化 縄文海進		10000年前		
	早期		早期	竪穴住居がつくられる 石刃鏃文化が波及する 札幌北部の低地が内湾となる
大規模な貝塚が形成される		7000年前		大規模な貝塚が形成される
	前期		前期	
		5500年前		
	中期		中期	紅葉山砂丘に人が住みはじめる
		4500年前		
	後期		後期	ストーンサークルがつくられる 周堤墓がつくられる
東日本に亀ヶ岡文化が広がる	晩期	3000年前	晩期	亀ヶ岡文化の影響を受ける
		2300年前		
水稲耕作がはじまる	弥生文化		続縄文文化	
邪馬台国 前方後円墳がつくられる	古墳文化		オホーツク文化	オホーツク海沿岸に北方系のオホーツク文化が広がる
仏教の伝来 大化の改新	飛鳥時代			
平城京に都がうつされる	奈良時代	1300年前	擦文文化	カマド付の竪穴住居がつくられる 鉄製品が一般化する 穀類が普及する
平安京に都がうつされる	平安時代			
鎌倉幕府がひらかれる	鎌倉時代	800年前	アイヌ文化期	土器にかわり鉄鍋が普及する 平地式住居がつくられる
室町幕府がひらかれる	室町時代			
戦国時代	安土・桃山時代			チャシが築造される
江戸幕府がひらかれる	江戸時代			

※北海道の時代区分は、考古学における一般的な時代区分を示しています。

※札幌市埋蔵文化財センター展示解説資料より引用、今後入れ替え。

○人が住み始める前

■地形・地質等

札幌が位置する石狩低地帯は、日高山脈の西部とアムールプレートである北海道西部の間に挟まれた海域に周辺の陸域から土砂が流れ込み浅海化することで形成されました。

250 万年前以降、石狩低地帯に形成された海成層が東西方向の圧縮により、褶曲を起こして馬追、野幌、月寒の各丘陵が形成されました。およそ 4 万年前には“支笏火山”が大規模な火山噴火を起こして石狩低地帯に広く支笏火山噴出物を堆積させ、月寒台地を形成しました。

■主な生息動物

札幌で確認のできる 1 億数年万年におよぶ歴史を通観すると、気候は寒冷期と温暖期の間を大きく変動し、海と陸の環境を何度も繰り返しました。この間において札幌市内から産出する生物の化石は、新第三紀中新世のおよそ 1200 万年～600 万年前の生物であり、南区の十五島周辺から小金湯にかけて数種類の貝類化石やカイギュウ類（サッポロカイギュウ）、鯨類（セミクジラ科）等の大型脊椎動物化石が発見されています。

さらにその範囲を石狩低地帯まで拡大すると、札幌周辺において火山活動が活発化する鮮新世（およそ 600 万年前）以降には、カイギュウ類、鯨類などの大型脊椎動物が、当時海でつながっていた北方の空知・宗谷地方や東方の十勝地方まで分布を拡大していることがわかります。また、陸域の生物については、南方系のナウマンゾウがおよそ 12 万年前に津軽海峡を経由して北海道に進入し、3 万年前にはオホーツク海側の湧別に到達していることから石狩低地帯を通過したことは間違いないといえます。また、北方系のマンモスゾウはエゾヒグマ、エゾシカなどとともに 4 万年ほど前の寒冷期にシベリア方面からサハリンを経由して北海道に進入し、およそ 3 万年前の温暖期には北上してきたナウマンゾウと入れ替わるように北方へ移動しましたが、2 万年ほど前の最寒期に、北海道に最初に進入してきた人類とほぼ同時期に再び南下しています。ただし、マンモスゾウの化石はこれまでのところ石狩低地帯以南からは発見されていないことから、石狩低地帯を越えた証拠は今のところありません。

■主な化石

◆ サッポロカイギュウ

札幌市内の小学生が平成 14 年（2002 年）に豊平川で発見した世界最古の大型カイギュウ（ジュゴン科ヒドロダマリス属）です。平成 15 年（2003 年）から本格的な発掘・調査が行われ、国内最古の大型カイギュウであった 500 万年前のタキカワカイギュウより古い約 820 万年前に生息し、世界で最も古い大型カイギュウで、体長は 7m 前後である寒冷系カイギュウ類であることが判明しました。現在は札幌市博物館活動センターで展示されています。

サッポロカイギュウ

◆ クジラ

平成 20 年（2008 年）に小金湯温泉地区（札幌市南区、定山渓の手前）豊平川河床で、およそ 1000 万年前と考えられるクジラの化石が発見されました。札幌市博物館活動センターにて、現在も調査が行われています。

◆ 軟体動物化石

豊平川の中流域簾舞付近の川床で、1600 万年～1100 万年前の巻き貝や二枚貝などが硬質頁岩層から発見されています。

①20000年前～15000年前（旧石器文化）

■年代

1 万年以上前

■文化の特徴

北海道には紀元前2万年頃から人が住み始めました。北海道で最も古い石器群は、台形様石器群とみられ、これは本州でも見られることから、その影響が考えられています。また北方地域から、細石刃石器群と呼ばれる、カミソリ状の刃で槍として使った石器の影響が考えられています。使用された石材は黒曜石や頁岩が多いです。特に黒曜石は遠軽町白滝が一大産地で、道南や南サハリンの遺跡でも確認されていることから、それらの地域と交流があったことが伺えます。

■出土物

● 石器

約 1 万 6000 年前の石器が、札幌市白石区本通（S 103 遺跡）、豊平区羊ヶ丘（T 464 遺跡）など月寒台地の上から出土しています。

②15000年前～2300年前（縄文文化）

■年代

◆ 早期…10000年前～7000年前

◆ 前期…7000年前～5500年前

◆ 中期…5500年前～4500年前

◆ 後期…4500年前～3000年前

◆ 晩期…3000年前～2300年前

■文化の特徴

気候が温暖になったことで、旧石器時代とは植生や動物相が大きく変化しました。その影響は旧石器人にとって主要な生活道具であった石器の変化にも表れています。

1万4000年前（旧石器時代の終わりごろ）に、新たに有舌尖頭器と呼ばれる、槍先の基部に舌状の突起をつけた道具が出現しました。日本列島の生態系が温暖化によって変化し、狩猟対象となる動物が変化したためではないかと考えられます。

また、温暖化によって新たな植物性食料が利用可能になり、それらを有効利用するために土器が作られました。竪穴式住居が作られ、大規模集落も誕生しました。集落の周りには豊かな自然があり、人々は漁労や狩猟採集を行いました。漁網用の石錘や

木を伐採する石斧、植物を加工するすり石、石皿などの道具が見つかっています。

大規模集落には、それを維持するための祭祀や儀礼の施設や道具がありました。自然に対する畏敬や畏怖の念が自然と強い関係性を持つ構造物を作り出したと考えられます。また共同体を構成する家族や親族などが、死んでもなお家族との繋がりを維持しようとしていました。周堤墓には死者は伸展葬で埋葬され、腕輪やネックレスをつけて埋められました。死者と関係性の深い人々は同じ墓に埋葬されたと想定できます。

③2300年前～1300年前（続縄文文化）

■年代

- 前期‥‥‥ 恵山文化・江別太文化、宇津内文化・下田ノ沢文化の東西二つの文化
- 後期‥‥‥ 後北式土器文化と北大式土器文化の前後半二つの文化

■文化の特徴

大陸から西日本に伝わった稲作は、寒冷な北海道には伝わりませんでした。北海道では依然として狩猟採集を中心とした生活が続き、縄文土器が使われていました。この時代は、本州の稲作農耕文化の時代と対比させて、続縄文文化と呼ばれます。

続縄文文化は大きく前期と後期に分かれます。前期は、道南の恵山文化、道央の江別太文化と道北の宇津内文化、道東の下田ノ沢文化の東西二つの文化に分かれていました。後期は、後北式土器が全道に広がった前半と北大式土器が使われた後半に分かれていました。

道南の恵山文化は、弥生文化と土着の文化の両方の要素を取り入れられていました。貝塚が多く残り、釣り針、銛などが出土しているため、海に依存していたと考えられます。道央の江別太文化は石狩低地帯で発生しました。のちに全道に広まる後北式土器は、江別太文化の土器でした。この文化は河川でのサケ・マス漁を行っていました。これら二つの文化は、住居跡の平面が円形で、張り出しをもつものもあります。土器は、甕形の他に、弥生文化の影響を受けた壺形や高坏が見られます。石器は、ナイフ形石器や魚形石器という漁労具がありました。

道北の宇津内文化は道北部からサハリン南端まで広がり、宇津内土器が使われました。道東の下田ノ沢式文化は道東部から千島列島中部まで広がり、下田ノ沢土器が使われました。これらの文化は、住居跡の形態が不整形で、張り出しをもつ例が多いです。土器は、甕形がほとんどでした。ナイフ形石器や石鏃には形態差があり、魚類石器は見られません。

墓の副葬品も、地域によって異なります。道南部（恵山文化）では緑色（碧玉）や赤色（鉄石英）の管玉が副葬されました。一方、道東部（下田ノ沢文化）では琥珀玉が副葬されました。道央部（江別太文化）では管玉と琥珀玉のどちらも出土しましたが、多くの場合、一つの遺跡からはどちらかの玉が出土しました。

続縄文文化後期後半には、道南の恵山文化が衰退したのち、江別太文化が広がりました。そしてこの文化の土器である後北式土器が全道に広がることで、東西で異なってい

た土器が共通するようになりました。後北式土器は表面に微隆起線文で縁取られた帯状縄文と刺突文による幾何学的文様を構成しています。この土器は、宮城県北部や新潟県から千島列島中部まで出土が見られます。本州の古墳文化との交流が考えられ、鉄器や装飾具を手に入れたと推定できます。これは、これまで使われてきた石器の出土が減少したことから考えられます。

また、続縄文文化後期後半は、北海道大学構内で発見された北大式土器が使われました。口縁部の突起や器の外側を飾る縞縄文が特徴的です。この頃の墓制は北海道と東北北部は類似しています。屈葬による土葬墓で、管玉や琥珀玉は副葬されず、古墳文化の系統をひく青色のガラス玉が副葬されました。

④1300年前～800年前（擦文文化）

■特徴

道南道央部にかけての続縄文文化は本州の文化との接触によって次第に変質し、特に7 世紀ごろに見られる、土器からの縄文の消滅は大きな変化でした。この頃の土器は、表面全体に刷毛目のような木のへらで擦った文様を持つのが特徴で、これによって擦文土器と呼ばれます。擦文土器が使用された時期を擦文文化期と呼びます。

墓制について、擦文文化期前期までは土壙墓が用いられ、縄文以来の屈葬形態でした。土器だけではなく、鉄製品が副葬され、その数は急激に増加しました。律令国家内で権力の象徴とされる刀剣類が副葬されることもあり、律令国家との接触を担う人々がいた現れたことが示されます。８世紀頃に、道央部に、東北の古墳の影響を受けた「北海道式土器」が出現しました。伸展葬と考えられ、土壙墓よりも刀剣類が副葬されることが多くなっています。したがって、本州の律令国家体制と強い関係を持つ人々がいたと考えられます。

8 世紀ごろになると竪穴式住居が出現しました。畑作に適した河川流域の段丘部に見られることや、住居内から栽培植物の種子が見つかることから、農耕が行われていたと考えられます。住居は数軒で構成され、遺跡ごとに住居の形や土器の様相が異なるため、本州から伝来した技術が、各地に広まりながら定着した過程を示していると考えられます。擦文文化期前期の上述のような遺跡は道南に集中し、道北部の多くは依然オホーツク文化でした。道内は複数の文化が併存していました。

擦文文化期中期には、擦文土器は道央部から道北部へ、後期には道東部へ分布が拡大し、１１世紀には全道がその分布領域となります。

擦文文化期には石器はほとんど出土せず、鉄器が出土するようになりました。前期には墓の副葬品としての出土がほとんどでしたが、中期以降は住居跡内から出土するようになり、また鍛冶遺構が全道に分布しています。

⑤800年前～西暦1867年

■アイヌ民族の起源論

和人の起源問題のみに焦点があてられ、アイヌ民族の研究への着手が遅れてしまったこともあり、アイヌ民族の起源は現在のところまだはっきりとわかっていません。しかし近年の研究により、出土された縄文時代前期の古人骨が近世のアイヌ民族に通じる特徴を持っていた等、徐々に解明が進んできています。

アイヌ民族の文化形成の主な母体となったといわれる擦文文化が、12世紀半ばに変容し、交易経済の発展による鉄製品や漆器などの移入により、土器に代わる容器を用いた文化内容と儀礼様式を持つ文化が12世紀末頃までに生まれました。この文化は、アイヌ民族の文化の構成要素と重複し、この時期にはアイヌ民族の文様も出現しています。

■アイヌ民族社会の形成

13世紀頃には「チセ」と呼ばれる住居をもち、本州との交易で手に入れた鉄鍋で煮炊きをする食生活をしていました。漁労、狩猟、採集、伐木を生業としていた彼らの生活は、本州や沿海州との交易によりさらに強化され、海浜を含めた大きな河川流域に強力な結束力を持つ地域集団を形づくりました。この頃に首長制的社会が成立したとみられます。

アイヌ民族はすぐれた口承文芸をもち、地域によって多少異なりますが「ウエペケレ」と呼ばれる散文説話と「カムイユカラ（神謡）」「ユカラ（英雄叙事詩）」の韻文物語があります。ユカラのテーマは擦文期後半のアイヌ民族社会であり、成立期は14世紀以降近世以前とされています。

■蝦夷地への和人の侵出

新羅之記録によれば、1456年から1525年までの70年間「夷賊蜂起止まず」と記録されており、渡島南部に経済活動の拠点を築く和人とアイヌ民族の紛争が絶えなかったことが分かります。1457年にはアイヌ民族の青年が和人に殺された事件を原因に、東部のアイヌ民族の首長コシャマインのもと和人に対して蜂起した、コシャマインの戦いが起こりました。

1550年、松前の蠣崎氏は、渡島半島東西両岸のアイヌ民族の首長と交渉し、和人の居住地（和人地）を認めさせました。1593年には、蠣崎慶広（後に松前と改称）が豊臣秀吉から朱印状を与えられ、蝦夷島の支配権を公認されました。その後、1604年には家康から黒印の制書を受け、松前藩が成立。蝦夷島におけるアイヌ民族との交易の独占権を得ました。

■札幌の名が史料に登場

札幌の名が歴史上に姿を表したのは、寛文9年（1669年）から翌年に抱えて起こったシャクシャインの戦いに関する津軽藩の史料が最初だとされています。松前藩のとった商場知行制によって自由な経済活動の場が狭められてきたために、自立的経済力を回復しようとして、藩支配に対して抵抗闘争を起こした戦いでした。

■場所請負制の成立

松前藩とその家臣が持っていたアイヌ民族との交易場所の経営権を和人商人に委ねて、運上金を受け取る形態の場所請負制が蝦夷地において一般的になりました。石狩川流域は、早くからサケが豊富に獲れるところとして知られ、その多くはアイヌ民族の食糧としての干鮭（からさけ）に、あるいは塩引きに加工されて本州方面に送られていました。17世紀後半に、石狩地方にも藩士に知行の代わりに与えるところの商場（あきないば）＝交易場が設定されました。札幌市域を含めてイシカリ十三場所（上サッポロ、下サッポロ、上ツイシカリ、下ツイシカリ、ナイホ、シノロ、ハッサムなど）が成立、夏商（干鮭、毛皮など）・秋味商（塩引鮭）を通じてアイヌ民族との交易を盛んにし、本州からは鉄製品をはじめ古着や装飾品などが多くもたらされました。

天明8年（1789年）には、支配階級化した請負人に対するアイヌ民族の蜂起として、クナシリ・メナシの戦いが起き、アイヌ民族と和人両者に多くの死者を出しました。

■安政～慶応元年の人別帳とアイヌ民族の人口の減少

1804～1817年の文化年間ころからアイヌ民族にも人別帳がつくられるようになりました。イシカリ場所において、現在人別帳が残っているのは安政3年（1856年）以降のものであり、当時は石狩川流域で166軒655人のアイヌ民族が居住していたとされています。しかし、その人別帳も実態とは乖離したもので、不居住の者や死亡した者、他行した者なども記載された虚偽のものだったと言われています。

安政3年（1856年）の人別帳によると、イシカリ十三場所における現在の札幌市域にはハッサム（石狩川左岸、発寒川合流地付近か）、上サッポロ（豊平川流域）、下サッポロ（豊平川流域）、シノロ（石狩川左岸、篠路川合流地付近か）、ナイホ（伏古川上流か）の5ヶ所※にコタンが存在しています。

上サッポロには20軒79人、下サッポロには5軒26人と人別帳には記載されているが、松浦武四郎によると、実際には上サッポロには彫工だった小使モニヲマの家のみで、下サッポロに至ってはまったく居住していなかったといいます。さらにハッサムには乙名コモンタ、小使リカンクル、土産取イワウクテ、ハシユイカニの4軒が暮らしていましたが、ナイホには居住者なし、シノロは不明でした。人別帳では当時、現在の札幌市域に住んでいたアイヌ民族は42軒177人とされています。

安政5年（1858年）のイシカリ改革で4ヶ所の番所がおかれ、人別帳は場所ごとではなく番所ごとに集計されるようになりました。慶応元年（1865年）の人別帳には、ハッサム番所に28軒98人のアイヌ民族が住んでいたと記されており、文化7年（1810年）には3,067人とされていた石狩川流域のアイヌ民族の人口は、115軒439人まで激減しています。

松浦武四郎はアイヌ民族の人口減少の主要原因として、①懐妊者の使役による流産や番人の妻妾女性の堕胎などによる出産の低下、②疱瘡（天然痘）の流行や過酷な労働による衰弱、自殺、病者の不治療などによる死病者の増加、③食糧不足や介抱家族の不在による凍餓死の増加、④他場所への逃亡の４点をあげています。

（※「石狩ファイル／いしかり砂丘の風資料館ＨＰ」より抜粋）

■石狩役所の設置

寛政11年（1799年）、対ロシア問題から東蝦夷地が幕府直轄となり、ついで文化4年（1807年）、西蝦夷地も直轄されました。文政4年（1821年）、蝦夷地は松前藩に復領されましたが、安政2年（1855年）に、幕府は北方問題の一層の緊迫化に対応するため、再び蝦夷地を直轄し、箱館奉行を置いて統括させました。この再直轄は樺太情勢を主要因としていたために西海岸が重要視され、その中でも大河が流れ、東西蝦夷地交通の要衝であり、また広大な平野を持つ石狩地方がその中心となりました。このため、同年に石狩役所が設置され、安政4年（1857年）には銭函から豊平、千歳を経て東蝦夷地の勇払を結ぶ札幌越新道が開かれ、この豊平川畔にはのちに吉田茂八、志村鉄一が渡守として住みました。さらに安政5年（1858年）には石狩の場所請負を廃して函館奉行の直支配とし、より強力な行政体制を敷きました。

■農業開拓のはじまりと大友堀

こうした中で札幌の農業開拓が始まりました。まず安政4年（1854年）から発寒、星置などにおいて移住者の農地が作られ、このうち発寒村は明治まで続きました。ついで石狩役所の責任者である荒井金助が自費で農民を招募して荒井村を開き、在住村である中島村と合併して篠路村となりました。しかしこれらは、農民に対して米など食糧の扶助を主体とする小規模のもので、成果もおのずと限界がありました。このため箱館奉行は年間3000両を投じ、農業基盤整備を十分に行って一層の開拓の振興を図ることとし、慶応2年（1866年）、まず大友亀太郎を担当者として現在の東区に御手作場（直営農場）を設置させました。そのとき開削した用水路のひとつが、後にその一部が創成川の一部となる大友堀です。こうして幕府の崩壊時には、発寒・琴似・星置・篠路・札幌（御手作場）の村々があり、農業が営まれていた。中でも早山清太郎は、安政5年（1858年）に稲作に成功しました。こうした中で、アイヌ民族にとっては、依然として苦しい生活が続いました。

大友亀太郎像　出典：札幌市公文書館

一ノ村新堀川（大友堀）　出典：札幌市公文書館

近代以降

①明治

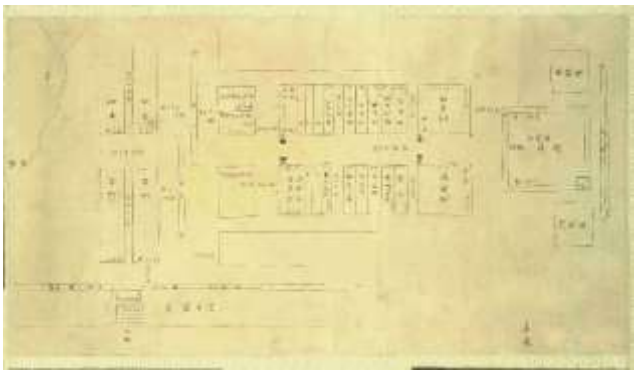
■開拓使の設置

明治2年（1869年）7月8日に開拓使が設置されました。初代長官に鍋島直正、判官に島義勇・岩村通俊が任命され、石狩辺に本府を置くことになりました。次いで8月15日、蝦夷地は北海道と改称され、国郡も設定されました。本府建設の準備を命じられた島判官一行は、10月12日銭函に到着し、その直後から本府地の選定と豊平開墾を開始、札幌を本府建設地と

しました。そして11月中旬から官舎官宅の建設を開始しました。

■島判官の描いた本府構想

島判官は、円山のコタンベツの丘から広がる大地を見下ろし、街づくりの構想を練ったといわれています。石狩国本府指図※に描かれた島判官の本府構想では、まず現在の札幌の中心部に、北端に300間四方の本府（本庁）敷地、その南側中心から南北の道路を通し、その道路の両側に長官邸をはじめとする官宅・病院・学校・役所などを配置しました。それらの南端に幅42間の空閑地を東西に帯状にとり、そこに二筋の土塁を設け、その南側に本町を配置しました。これらを現在の札幌に当てはめると、南北の道路は南から北へと流れる創成川東岸の道路、空閑地は大通となります。この計画は途中まで実行され、創成川東岸で大通の南端に大門を設け、北部を官庁・官宅街、南部の本町には商工業者を入地させて民地としました。さらに西方に御宮を配置し、琴似・発寒・篠路・札幌の既存の村と新設の豊平村を周辺に配置しようとしました。しかし雪と寒さに加え、食料や予算の不足もあって、北海道西部13郡の経営は困難を極めました。さらに、東久世通禧長官が、西部13郡の場所請負人廃止と漁場の開拓使直営などを島判官の独断専行と判断したためか、その報告を受けた政府は、島判官を東京に召喚後転任させました。



石狩国本府指図　出典：北海道大学付属図書館

■岩村判官が受け継いだ本府建設

先に島判官によって計画募集された移民は続々と札幌付近に移住し、庚午一の村（苗穂）・庚午二の村（丘珠）・庚午三の村（円山）などができました。明治3年（1870年）9月に東久世長官・黒田清隆次官らが札幌を視察して、島判官の雄大な構想を改めて認識し、正式に明治4年（1871年）から札幌への本府建設が決定しました。同年に札幌に赴任した岩村判官らは、移民の招致、道路工事、市外の測量などに着手すると共に、島判官の構想を一部変更し、開拓使庁舎や官邸、役所の建設を再開しました。市街地は11間幅（約20m）の道路を南北に交叉させる碁盤の目状としました。その基本的なブロックは、60間四方（3600坪：約11,880㎡）とし、6間幅（約11m）の中通りを設けました。そして幅3尺の側溝を道路両側に付けたり、市内最初の公園でかつ農業試験場である偕楽園の建設、最初の官立学校である資生館設置など近代的色彩も濃いものでありました。その一方で市街地に隣接して遊郭を設けたり、移民に割渡した区画も標準が間口5間奥行き27間（135坪：約446㎡）の短冊型であるなど、近世都市の様式も取り入れていました。しかし、これらの建設も明治6年（1873年）に一段落すると、工事人夫たちの離札と共に、札幌は公共投資欠乏のため市中に大不況が襲い、庶民の生

地図

活は困窮し、逃亡者が多く出て、生活基盤のない人工都市の側面も露呈しました。

■各村の行政区域の確定と札幌本府の境界の決定

明治4年（1871年）以降、平岸・月寒・白石・手稲などへ移住が行われ、明治7年（1874年）2月、本府に隣接する琴似、山鼻、札幌（元村）、円山、篠路、豊平、白石および苗穂の各村の行政区域が確定しました。こうして、本府の外周線は決定し、他動的に札幌本府（区）の境界が決定しました。

■アイヌ民族の同化政策

明治4年（1871年）に戸籍法が公布され、明治政府はアイヌ民族の和名による戸籍を作成して日本国民とする一方で、彼らを「旧土人」と呼んで和人との区別を明確にしました。

幕末から始まったアイヌ民族の同化政策は、日本語と日本文字の教育、狩猟や刺青などの生活習慣の事実上の禁止など徐々に強化されていきました。さらに彼らの土地を官有地として一旦編入するなど、アイヌ民族の生活の基盤は大きく揺らぎ、困窮していきました。

■屯田兵制度の制定

明治 7 年（1874 年）、屯田兵制度が制定され、翌年 1875 年には琴似に、1876 年には山鼻・発寒に移住しました。

この頃には、中央政府の殖産興業政策にならい、札幌にも生糸・みそ・しょうゆ・ビール・諸機械などの官営工場が続々と建設され、開拓使では、これらの原料となる農産物を農民に奨励しました。しかし、農民は、米についての強い執着および農業に必要なわらの供給や生活習慣などから稲作への思慕を捨て去ることが出来ず、稲作の努力を続け、明治 10 年代中頃から札幌付近でも作付けされるようになりました。

琴似屯田兵屋　出典：札幌市公文書館

■交通網の整備

明治 6 年（1873 年）に函館～札幌間の札幌本道が開通、明治 12 年（1879 年）に小樽～銭函間馬車道路が開通、翌明治 13 年（1880 年）には札幌～手宮間の鉄道も開通し、道庁時代初期にかけて交通網が整備されていきました。

■札幌農学校の開設

明治5年（1872年）に北海道の開発に従事する人材育成のため、東京に開拓史仮学校が開設されたのが始まりであり、明治8年（1875年）に札幌に移転し札幌学校と改称され、さらに翌年に札幌農学校と改名されました。

■明治時代のアイヌコタン

明治8年（1875年）には琴似村にサクシュコトニ川流域に沿った偕楽園内に位置した聚落があり、琴似又一（又市）を始めとした3戸7人が暮らしていました。

明治11年（1878年）に発寒村の発寒川流域に沿った聚落で暮らしていたとされる木杣卯七、発寒小紋太、能登岩次郎、伴六、多気安爾、規也里の6戸は、数年後には1戸が石狩、5戸が篠路村へ転居したとされています。また、明治12年（1879年）札幌村にあったフシコサッポロ（伏古）川流域に沿った聚落には、小藤友輔と藤戸善蔵の2戸があったとされていま

す。

対雁を含めた札幌のアイヌ民族の戸口の推移をみると、明治7年（1874年）の11戸46人が翌年には163戸915人に増加しており、これは対雁移住の樺太アイヌ民族を含めていると思われます。また、明治18年（1885年）の151戸748人が翌年150戸410人に激減している理由として、対雁アイヌ民族のコレラや天然痘の流行が考えられます。さらに、当時は安住の地を求めて旭川などに移住する人や、東京に設置された開拓使仮学校附属北海道土人教育所に選ばれて上京した人々もいました。

■開拓使の廃止

明治 15 年（1882 年）、開拓使が廃止され、北海道は札幌・根室・函館の三県に分離されました。この頃の札幌区郡の人口は 18, 123 人、戸数は 4, 630 戸でした。

■環境の整備

多年にわたり洪水を起し、その度に大きな被害を与えてきた豊平川に堤防が明治 17 年（1884 年）に完成しました。さらに翌年には市民の要望の強かった市中の大下水網が、南 6 条～北 1 条間の西 5 丁目（後に新川とよばれる）を皮切りに、道庁時代初期にかけて開削され、整備されました。そして区市街の総代人会で地主のアカシア・さくら・やなぎなどの街路樹の植え付け管理が可決されるなど、現在の環境整備や都市基盤整備に当たる政策が実行に移されていきました。

■北海道庁の設置

北海道庁庁舎　出典：北大北方資料室

三県制度は、明治 19 年（1886 年）に廃止となり、北海道庁が札幌に設置され、函館、根室に支庁が置かれました。初代長官には、岩村通俊が命ぜられました。岩村は、北海道への資本の導入に努力し、官営工場の払下げとともに、札幌での民間工業の発展を促しました。また、道庁時代初期には札幌周辺の開拓のため、現在の新川である大排水路などを開削し、鉄道線路以北の湿地帯の開発を促進させ、明治 20・21 年（1887・1888 年）の新琴似屯田、明治 22 年（1889 年）の篠路屯田などを移住させました。

■生活環境の整備と札幌大火

明治 20 年代の札幌区内は、札幌県時代から引き続き、下水施設の整備、市街道路や周辺村落との連絡道路の砂利敷き改良など生活基盤の整備を行いました。また、都市衛生の観点から、汚水・し尿処理や市街清掃・塵芥処理など生活環境の整備にも目が向けられるようになりました。当時の札幌は、全道各地への労働力供給地となっていきました。

明治 25 年（1892 年）、札幌は大火に見舞われ、区役所、地方裁判所、銀行、警察署、新聞社など 887 戸が類焼しました。この年は、北海道物産共進会を開催する予定でいただけに、その打撃は大きいものがありました。

■遠友学校など教育施設の開設

明治 27 年（1894 年）、新渡戸稲造と彼の支持者によって遠友学校が開設されました。これは、貧しい人々や昼間学ぶ機会のない人々に教育の門戸を開いたものでありました。さらにこの頃は、禁酒会など社会改良運動や県人会運動などの社会運動・活動が盛んになった時代でもあります。

遠友学校新校舎　出典：札幌市公文書館

明治 32 年（1899 年）頃からは、教育の充実が取り上げられ、女子教育充実のために庁立札幌高等女学校が設立され、明治 40 年（1907 年）には、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となりました。

■北海道区制と札幌の人口

明治 32 年（1899 年）、札幌は、函館・小樽とともに北海道区制が施行され、はじめて道庁による官治時代を脱して、自治時代に入ることとなりました。当時の札幌区の人口は、40,578 人、戸数 7,009 戸でした。

これより先、北海道二級町村制が明治35年（1902年）に手稲・豊平・白石・札幌各村、明治39年（1906年）に琴似・藻岩・篠路各村に施行されました。市域の発展に伴い、明治43年（1910年）には豊平・白石・札幌・藻岩の各町村の一部が札幌区に編入され、区の人口もおよそ9万人を数えるに至りました。

地図

※このころの地図を掲載

札幌区の人口は日露戦争前後より増加傾向を示し、札幌は北海道庁その他諸官庁の所在地として、いわば「月給取り」の街・一大消費都市として発展し続けました。明治 42 年（1909 年）、札幌区が実施した「札幌区区勢調査」で、区民の半数以上が明治 37 年（1904 年）以降の移住者であり、区民の 8 割が借地借家住まいであることなど、札幌が人の入れ替わりの非常に激しい街であることがわかりました。また札幌の地価は他都市と比較して高額であり、地代家賃は高かったのです。

■北海道旧土人保護法の制定

明治32年（1899年）に制定され、その後幾度か改正された「北海道旧土人保護法」はアイヌ民族に一定の農地を与える代わりに狩猟や漁業を禁止し、病者には薬を与え、日本語使用を義務付ける等の法律でした。アイヌ語の使用を禁止され、アイヌ民族の子ども達はアイヌ語や風習を教わる機会を失っていくこととなりました。この法律は、その名の通りアイヌ民族を保護するという名目でつくられた同化政策の一つでしたが、日本国民としての旧土人を保護するものであって、アイヌ民族及びその文化を保護するものにはなりませんでした。

■日露戦争の影響

明治 37・38 年（1904・1905 年）の日露戦争は、札幌の市民生活を大きく変化させました。まず、社会改良的運動であった社会活動は、戦争を機に出征軍事家族救護の名のもとに、さまざまな救護団体を生み、活動するようになりました。そして、この時期には食生活にも徐々に変化が見られ、牛乳、肉、卵など栄養価の高い食物も一部の人びとから広まりつつありました。西洋料理にも工夫を凝らすようになり、スープ、アイスクリーム、ミルクソーダなども加わりました。また、札幌初のデパートが開業し、女店員を採用したり、映画の常設館が開業したりするなど札幌の顔が増えていきました。豊平館を公会堂として使用することや、大通りを逍遥地として利用することが許されるのもこの頃からでした。

②大正

■開道五十年記念北海道博覧会の開催とその影響

大正 7 年（1918 年）は開道 50 年に当たる年で、記念事業として博覧会が開催され、入場者は、1 か月半の期間中に 140 万人を数えました。当時の全道人口が 217 万人であるから、その盛会ぶりがうかがえます。札幌は、広く全道、全国に紹介され、会場に隣接する山鼻地区は急速に開けていきました。この博覧会を契機に、市内馬車鉄道が廃止され、電車となりました。農科大学が東北帝国大学から分離し、北海道帝国大学となったのも同じ年でした。

開道五十年記念北海道博覧会
出典：札幌市公文書館

■第一回国勢調査と札幌市の人口

大正 9 年（1920 年）、第 1 回国勢調査が実施され、札幌の人口は 102,580 人を数えました。市制が施行された大正 11 年（1922 年）8 月 1 日には、札幌市の人口は 127,044 人、戸数は 22,915 戸、面積は約 24 ㎢でした。大正時代は区制が充実し、市制の施行により自治制の進展期であるとともに、産業の振興期でもありました。

■第1次世界大戦と北海道庁の動き

大正 3 年（1914 年）にはじまる第 1 次世界大戦は、市民生活にさまざまな影響をもたらしました。農産物を中心とする海外輸出は急激に増加し、このため、札幌の周辺農村は異常な好景気に包まれ、札幌市街の商店街では古着や子どものおもちゃがよく売れました。

大正 7 年（1918 年）のシベリア出兵に際し全国各地で米騒動が起こり、札幌でもそのあおりを受けて米価が急騰しました。また大戦中から大戦後にかけての景気の変動は、物価高騰による生活不安を訴える人々を多く輩出させました。北海道庁が大正 10 年（1921 年）に社会課を設け、社会事業を公的に推進したのを受けて、札幌区は、区営住宅建設・公設市場・職業紹介・窮民救助その他の社会事業的業務を分担し、これが翌年の社会係設置につながりました。

■戦後の市民生活

第一次大戦後の国民生活の改善を図ることを趣旨に北大教授の森本厚吉を中心に文化生活研究会が設立され、「文化住宅」、「文化台所」など「文化」が喧伝されました。また道庁主

催で生活改善展覧会が各地で開催されて、生活の見直しが図られたり、美術展、音楽会も盛んに催されたりするようになりました。

さらに大正 12 年（1923 年）、都市計画法適用、大正 15 年（1926 年）、市街地建築物法適用など札幌市へも都市計画関係法が適用されて、昭和に入り本格的な都市計画事業が実施されていきました。

■アイヌ民族とジョン・バチェラー

明治初期にイギリス聖公会（ＣＭＳ）の宣教師として来日し、アイヌ民族へのキリスト教の布教活動に従事したジョン・バチェラーは、アイヌ民族の人権や文化の保護のために尽くし、「アイヌ民族の父」と呼ばれています。バチェラーが運営していた札幌の「アイヌガールズスクール」には、後に養女となる伊達町有珠のアイヌ豪族の娘・バチェラー八重子も通っていました。

ジョン・バチェラー
出典：北大北方資料室

バチェラーは、現在の北海道庁別館の南東角に当たる北3条西7丁目にあった自宅に「アイヌ保護学園」という組織を設立し、大正13年（1924年）には敷地内に寄宿舎を建設しました。アイヌ民族の中等学校進学希望者への経済的援助を目的とする「アイヌ教化団」事業の一つであり、昭和4年（1929年）に「アイヌ保護学園」から「バチェラー学園」に改称しました。バチェラー学園が法人化された昭和6年（1931年）度の入所者は14人で、昭和8年（1933年）度は13人だした。学園はバチェラーが帰国する昭和15年（1940年）まで続きました。

③昭和

■次々と行われた都市計画事業

昭和 2 年（1927 年）、都市計画区域が札幌市だけでなく豊平、琴似、藻岩、白石、札幌の 1 町 4 村の一部を含む広大な地域に設定されました。その後、都市計画による事業（街路整備・風致地区整備、公園整備など）に加え、上下水道の整備、道路の整備、市営バスやなど交通体系の整備などさまざまな事業が順次行われました。

札幌飛行場　出典：札幌市公文書館

また、この頃からカフェーが増加し、映画館が繁盛する一方で、スポーツも次第に盛んとなりました。そのため、昭和 4 年（1929 年）に中島公園にプールが設置され、昭和 6 年（1931 年）には大倉シャンツェが竣工し、昭和 9 年（1934 年）、円山に総合グラウンドが竣工しました。

■増加する札幌市の人口

昭和 15 年（1940 年）に実施された第 5 回国勢調査で、札幌市は人口が 20 万人を突破し、函館市を抜いて人口で全道一の都市となりました。翌年には円山町を合併し、人口 224,729

人、世帯数 45,488 世帯となった。

■日中戦争と市民生活

昭和 12 年（1937 年）の日中戦争ぼっ発は、札幌市民へも大きな影響を与えました。次回の開催が決定していた冬季オリンピックの返上もその一つですが、新聞でも出征兵士の見送り、金品や物資の供出や倹約などを盛んに宣伝しました。

■太平洋戦争と市政

太平洋戦争のぼっ発は、市政の上に大きな影響を与えたばかりでなく、市民は窮乏生活を営むことを余儀なくされ、戦争協力のために各方面に動員されました。すでに戦時協力のための住民組織である公区制がしかれ、市民は食糧をはじめとする物資の配給は、公区の隣組を通じてしか手に入らない状況となり、食糧の不足を補うため野草採りや家庭菜園が奨励されました。また出征した男性の代わりに女性が労働力として動員され、女子挺身隊の名で軍需工場などで働きました。

昭和 20 年（1945 年）、米軍による大都市空襲は次第に地方都市にまでおよび、札幌近郊も被害を受けました。やがて、広島・長崎への原子爆弾の投下があり、敗戦を迎えました。

■戦後の札幌

昭和 20 年（1945 年）10 月には敗戦にともない札幌にも占領軍が進駐し、豊平館をはじめ大きな建物、円山総合運動場などの施設が接収されました。この年は全国的に大凶作となり、主食糧の配給も不足しがちで、「食糧問題が市政の最重要事」といわれるほどでありました。

翌年は食糧不足をはじめとする諸物資の不足でヤミ値を生じさせるとともに、インフレが発生しました。札幌でも狸小路の創成川縁一帯にヤミ市ができ、生活必需品を求める市民が集まりました。また外地からの引き揚げや疎開者の復帰などは、出生の増加とともに、札幌市の人口を急増させ、住宅不足の状況となりました。

闇市（狸小路）　出典：札幌市公文書館

■民選による札幌市長の誕生

昭和 22 年（1947 年）、市長が初めて公選となり、民選市長のもと市民と一体となって市民生活の再建と新しい都市づくりを進め、市の機構も部制が敷かれて 1 局 5 部 24 課となりました。食糧問題や引き揚げ者受け入れなど山積する問題をかかえた市は、翌 1948 年、警察制度、消防制度の改革によって自治体警察、自治体消防が発足し、札幌警察署および消防本部が設置されました。昭和 24 年（1949 年）、札幌市は創建 80 周年、自治制施行 50 周年を迎え、盛大な記念式典が挙行されました。

札幌市創建 80 周年自治施行 50 周年記念行事
出典：札幌市公文書館

■北海道の開発計画

昭和 26 年（1951 年）、北海道開発局が設置され、翌年、北海道総合開発計画第 1 次 5 カ年計画が策定されました。開発計画の推進に伴い、大資本を背景とする本州の有名商社が札幌

市に集中してきたため、都市規模が急激に拡大していきました。

■100万人を超えた札幌市の人口

徐々に経済安定の兆しも現れ、食糧事情も好転し、市民生活も安定の方向に向かいました。昭和 25 年（1950 年）には、第 1 回雪まつりが開催され、その後市民の冬のレクリエーションとして定着しました。

昭和 30 年代、高度経済成長期の全国的な都市集中傾向は、北海道における中心都市である札幌市で特に顕著となり、道内石炭産業の不振から生じた炭鉱離職者の札幌市流入とかさなって、人口は昭和 40 年（1965 年）に 794,908 人で昭和 30 年（1955 年）から 37 万人も増加し、昭和 45 年（1970 年）には 1,010,123 人となり 100 万人を超えました。周辺町村のベッドタウン化がすすむとともに、1955 年には札幌村、篠路村および琴似町と合併、昭和 36 年（1961 年）には豊平町、昭和 42 年（1967 年）には手稲町と合併し、面積 1,117.98 ㎢となりました。

地図

※このころの地図を掲載

■札幌オリンピックと発展

札幌オリンピック開催が決定すると昭和42年（1967年）には「札幌市建設 5 年計画」が策定されました。オリンピック関連施設の整備事業などに国や道の資金も札幌都市建設や社会資本整備に投入されたため、一都市での財政規模以上の都市建設・都市整備が実現しました。市役所新庁舎、都心部地域暖房、地下街、北海道厚生年金会館などが相次いで完成、昭和 46 年（1971 年）に開通した、そしてオリンピックを目指した民間資本の建設ラッシュと相まって、都心部の様相は一変しました。そのため札幌はオリンピックを境にその景観が一変したと言われるようになりました。

地下鉄南北線　出典：札幌市公文書館

昭和 47 年（1972 年）に開催されたアジアで初の冬季オリンピック大会は、成功裏に終了しました。

■姉妹都市提携と政令指定都市・札幌

札幌市の急激な発展は、国際的にも注目を浴びはじめ、昭和 34 年（1959 年）、米国ポートランド市と姉妹都市提携の盟約を交わしました。その後も昭和 47 年（1972 年）ミュンヘン、昭和 55 年（1980 年）瀋陽、平成 2 年（1990 年）ノボシビリスクと姉妹都市や友好都市の盟約をむすびましだ。

札幌オリンピック開会式　出典：札幌市公文書館

昭和 47 年（1972 年）4 月には、川崎、福岡両市とともに政令指定都市に移行し、中央・西・北・東・白石・豊平・南の 7 区体制となりました。

■石油危機と札幌市の人口増加

昭和 48 年（1983 年）10 月の中東産油国の一斉値上げに端を発した石油危機は、世界経済を混乱させました。札幌でも、スーパーのトイレットペーパー販売に行列をつくるなど、市民生活へも少なからぬ影響を及ぼしました。

昭和 50 年代に入ると、長期的な経済不況による影響などから札幌市の人口増加は鈍化傾向となっていましたが、道内景気の回復とともに安定した増加を続け、昭和 63 年（1988 年）には人口 160 万人に達しました。

■人口の急増と都市問題

人口の増加による住宅地の広がりや道路整備による舗装道路の広がりは、それまで地下に浸透していた雨水までも下水道に流し込むことになり、下流の下水道からあふれ出る都市型水害を起こすようになっていきました。昭和 50 年（1975 年）や昭和 56 年（1981 年）の洪水などは、大雨や台風による石狩川や茨戸川の氾濫に加え、それらの雨水を引き受けた下水道の下流地域での噴出なども起こり浸水被害を大きくし、典型的な都市型水害でもありました。このような都市問題への対処も求められるようになっていきました。

1981 年洪水被害　出典：札幌市公文書館

■札幌の交通

昭和 46 年（1971 年）12 月を皮切りに開通した地下鉄とその主要駅は、乗り継ぎ駅としてバスターミナルなどを整備しました。国鉄およびＪＲでは、千歳線の切り替えによる新駅の整備、郊外での住宅地の広がりに対応して森林公園駅開設をはじめとして既存の駅の間に新駅を設けるなど札幌とその周辺との交通の便を拡充しました。さらに札幌市の南北の連絡を阻害していた函館本線の高架事業が行われました。これにより札幌の南北の交通を分断していた踏切が無くなり、北方への発展が促進されました。それにともない広域道路網は、都心部に集中する国道などの主要道路について、バイパス道路の整備、都心から郊外へ向かう放射状道路、都心を取り巻く環状道路を整備し再編成を行いました。

④平成

■札幌の行政区域

札幌市の人口は、増加数が年々小さくなってきたものの、平成 27 年（2018 年）には 195 万人に達しました。その間住宅地はさらに広がりをみせ、平成元年西区と白石区を分区してそれぞれ手稲区と厚別区を設置し、平成 9 年（1997 年）に豊平区を分区して清田区が設置され、10 区体制となりました。

■アイヌ民族文化の振興法と国連宣言

戦後間もない昭和21年（1946年）に社団法人北海道アイヌ協会が設立し、北海道ウタリ協会に改称後再び北海道アイヌ協会へと改称され、平成26年（2014年）には公益社団法人北海道アイヌ協会として認定されました。

「国際先住民族年とアイヌ民族の人権」シンポジウム
出典：札幌市公文書館

北海道アイヌ協会は、国や北海道庁に対して北海道旧土人保護法の改正・廃止やアイヌ民族共有地の返還、アイヌ民族に関する法律の制定などを求める活動を続けました。平成9年（1997年）7月には、「アイヌ民族文化の振興並びにアイヌ民族の伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」（略称 アイヌ民族文化振興法）が公布、施行され、同時に北海道旧土人保護法が廃止されました。

■イベントと国際化

昭和 61 年（1986 年）と平成 2 年（1990 年）のアジア冬季大会、翌年のユニバーシアード冬季大会、平成 2 年（1990 年）から行われているパシフィック・ミュージック・フェスティバル（ＰＭＦ）、平成 11 年（1999 年）中央アジア非核兵器地帯国連札幌会議など国際的なイベントや会議を開催し、国際コンベンション都市となっています。また雪まつりやＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭りなどの市民の手作りで始まったイベントも外国からの参加団体が増えて、国際的なイベントになっています。

PMF（第 1 回）　出典：札幌市公文書館

■札幌市のまちづくり

札幌駅周辺の整備も進み、ＪＲタワーの建設、大丸デパートや電気製品の大型量販店など大ショッピングセンターの開業に加え、札幌駅北口方面の開発も進み、エルプラザや国の合同庁舎建設などがあいつぎ、札幌の集客の中心が大通南 1 条から札幌駅周辺に変わりました。

平成 4 年（1992 年）には「魅力ある都市景観について」などの『街づくりサッポロ会

議提言』が出されました。また、平成 12 年（2000 年）策定の『第 4 次札幌市長期総合計画』により、時代の変化に合わせた見直しがなされています。平成 16 年（2004 年）からは、「街づくり市民会議」が設置され、札幌市の素案を検討した『札幌新まちづくり計画に関する提言』をふまえた『札幌新まちづくり計画』が策定されました。

最近の札幌市では、政策や事業の決定のために多くの部署が、パブリックコメント、フォーラム、シンポジウムなどより多くの市民の意見をふまえる取組を行っています。また役所の各部署は、パンフレットの発行やホームページなどで市民へ向けて情報発信しています。

■札幌の防災・公害対策

阪神淡路大震災とその後の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故を契機に、札幌市地域防災計画を抜本的に見直し、地震災害対策編、風水害対策編、雪害対策編、事故災害対策編、原子力災害対策編などを含んだ計画に改定しました。

また、避難場所や応急救援備蓄物資の整備のほか、市民や地域の防災力（自助、共助）や防災意識を高めるため、自主防災活動への支援や防災普及啓発に取り組んでいます。

■今後の札幌市

今後も札幌市は、国際化の進展、高齢化の進行、さらに情報化といった社会的変化に対応しつつ、都市化の進展がもたらすさまざまな問題を考慮しながら、21 世紀の都市づくりを進めていく必要があります。